



## 金星圭と金祐鎮、3・1運動前後における世代葛藤の一断面

著者	権 ボドゥレ
雑誌名	同志社コリア研究叢書
巻	1
ページ	203-250
発行年	2014-03-10
権利	同志社コリア研究センター
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/re.2017.0000016042">http://doi.org/10.14988/re.2017.0000016042</a>

## 8 金星圭と金祐鎮、3・1運動前後における 世代葛藤の一断面

クォン  
權 ボドゥレ

### 1. はじめに

日記・手紙・遺書・その他の自伝的記録を通じて、<sup>キムソンギョ</sup>金星圭・<sup>キムウジン</sup>金祐鎮父子の間の世代葛藤の様相を復元することが本稿の目的である。資料としては、金星圭が遺した『草亭先生文集』、金星圭の従孫が筆写した書翰集『雲章要訣』、金祐鎮の日記である『農場日誌』および「心の跡」、彼の作品である戯曲「難破」を主に利用した。<sup>チョジョン</sup>草亭・金星圭（1863～1935）は庶子として生まれながらも、大韓帝国期には高級官僚を務め、職を辞した後は全羅南道の<sup>チャンソン</sup>長城地域で大地主として身を立てた人物である。また、<sup>アンドン</sup>安東金氏草亭公派の創祖であり、<sup>モッポ</sup>木浦で結成された儒山詩社の初代会長も務めた。<sup>スサン</sup>永山・<sup>ユンシムドク</sup>金祐鎮（1897～1926）は、歌手尹心憲との情死によりスキャンダルの主人公になったこともある人物であるが、彼は生前、個性的な評論・戯曲、膨大な量の作品を遺しており、韓国文学史において重要な位置を占める作家である。とりわけ、未発表の遺稿である「難破」などでは、自伝的な父子葛藤の様子を余すことなく描いており、大きな関心が寄せられてきた。

この2人の存在が重なる時期、すなわち19世紀末から20世紀初めにかけて、韓国は急激な社会変動のさなかにあった。このような状況にあっては、性・階級・地域・世代間で広範な動揺や混乱、内部の屈曲があったことは当然である。しかし、この時代を生きていた個人の生は、従来、主に救国や啓蒙といった概念で解釈されてきた。金星圭と金祐鎮、この非凡な父と

息子については、これまで極めて多くの研究がなされてきたが、彼ら2人の間の世代葛藤そのものに焦点を当てて研究をすれば、これまでの議論をより深めることができると思われる。20世紀半ば以降、近代韓国の経験において原型として作動することになった19世紀末から20世紀初めにかけての世代葛藤は、<sup>イグワンス</sup>李光洙が提示したような座標、すなわち「先祖もなき者、父母もなき者(…) 天上から吾士に降臨したる新種族」<sup>1</sup>であることを自認する新世代が、全面的に過去を否定するという様相を呈していた。本稿では、金星圭と金祐鎮を通して、李光洙のような経験とは区別される、もう1つの世代葛藤の様相を1つの事例として提示する。

ところで、「進歩としての歴史」という概念は依然として有用であろうか。有用であるとしても、あるいはその可能性のためにも「進歩としての歴史」は、異なる視点から批判され、修正され、補完されなければならない。従来の歴史解釈において、金星圭世代の生と金祐鎮世代のそれは、救国や啓蒙といった概念で解釈されてきたが、その結果、彼らの生は今日にはそぐわない参照しがたい形骸として記憶されるようになった。この荒涼とした風景が、今日我々が目にしている過去であるならば、また「進歩としての歴史」がたやすくこの風景を超えることができないというのであれば、「凡例としての歴史」として理解するのはどうであろうか。コゼレック(R. Kosellek)は近代以前、すなわち「進歩としての歴史」が定立する前の歴史叙述に、「凡例としての歴史」意識が席卷していたことを明らかにした<sup>2</sup>。現在の相似型としての歴史、すなわち事例や教訓として参照すべき対象となる歴史一日記・手紙・遺書・文学的創作まで含め自伝的記録を通じて、金星圭・金祐鎮父子の生にアプローチするとき、最終的に残るものはこのような意味での歴史意識に近いであろうと思われる。「凡例としての歴史」

---

<sup>1</sup> 李光洙「子女中心論」『新生活論』博文書館、1925、pp.140～141。

<sup>2</sup> R. Kosellek, 한철 옮김 『오래된 미래』 문학동네, 2003

は退行であるかもしれないし、「個人の記録 (ego document)」という領域に、文学テキストまで含めることも過度な拡張であるかもしれないという思いを拭い去ることはできない。本稿が微力ではあるが、試論としての価値を持つことを望むばかりである。

## 2. 儒学理念と実業精神

草亭・金星圭は、1934年に作成した遺言状のなかで自身の信念を「報恩主義」という単語で要約した。「報恩の2字は余の生涯を一貫したる主義」というのが金星圭の第一声である<sup>3</sup>。忠や義には限度があるが、孝友〔父母に対する孝行と兄弟間の友愛〕は因果がはっきりとしており、しかも果てるどころのない最高の道理と考えたわけである。当時、72歳であった金星圭は子孫に対し自身の信念を信じ、実践することを求めている。子孫の財産を共同管理する祥星合名会社や、宗中共有財産を運営する報恩社を設立したのも「報恩主義」の制度的かつ財政的な基盤を整えるためであった。孝友を実践せよという意味にほかならない「報恩主義」それ自体は、古めかしい封建的な言語のようにも聞こえるが、金星圭はそれを実現する手段として近代的機構と規律とを用いた。遺言状では、大宗家の財産を約1年前に設立された朝鮮信託株式会社に100年の期限で預けることが述べられているだけでなく<sup>4</sup>、報恩主義を盛んにするための賞罰規則についてもこまごまと述べられている。賞罰規定では、咎のある場合、まず個人的に忠告し、それでも改善が見られない場合、家族会議での公開的な警告によって制裁

<sup>3</sup> 「草亭居士遺言書第4号」『草亭先生文集』巻3（『韓国歴代文集叢書』1778，景仁文化社，1996，237）以下『草亭先生文集』からの引用は記事名と巻数を表記し、具体的な典拠は影印本の巻数（1778巻→Ⅰ，1779巻→Ⅱ，1780巻→Ⅲ）とページ数にしたがって表記する。

<sup>4</sup> 朝鮮信託株式会社の設立および独占化の過程については、김명수 「일제하 조선신탁회사의 설립과 신탁통제의 완성」(『연세경제연구』13집，2006)を参照。

すること、このような制裁では不十分な重罪を犯した場合には、民事訴訟ないし刑事訴訟を提起するとともに、会社での決議権を中止させ、それでも改善が見られない場合には、禁治産を宣告し、最終的には社員資格自体を剥奪することを規定していた（I：254～256）。金星圭は報恩主義を実践していくための儀礼についても細かく指示していた。家族会議や遺言奉読式が定例化された儀式に属するとすれば、定款の遵守や就寝前の反省は日常生活のなかで実践されるべき事項であり、最後に挙げている「東洋倫理の確守」という項目は、これらの行為を支える理念的な論拠となった。金星圭によれば、東洋理念が三綱五倫を基軸としているのに対し、西洋倫理は個人主義を核心としているため、両者の間には超えることのできない厳然たる違いがあった。「今日、吾人をして西洋人の主義と風俗とに盲従せしむるは、魚をして陸棲せしめ、鳥をして水泳せしむるか如き、其の發達するを得ざる」ようにするだけであった。彼にとって当時流行していた「西洋文明陶酔病」は、「国の喪乱、家の敗亡、一身の墮落」を引き起こす、まさに唾棄すべき一種の奇病にすぎなかった（I：262～263）。

孝友を強調し、東洋古来の倫理を擁護する金星圭の視点は、現実社会を見るときにも一貫していた。1919年5月、京城日報社と毎日申報社とが合同で3・1運動に対するアンケートを行ったとき、金星圭は「施政に対する不平不満と不快感」の事例として、墓地法・民籍法・印紙税・道路賦役において日本人と朝鮮人との間に差別が設けられていることなど、植民地人としての不満とは別に、儒教の軽視・孝烈の無視・男女礼制や長幼階級における旧例違反を重要な事項として挙げていた。「有知階級」の不満をほかにも挙げよという指示に対しては、教育・参政権・官職進出における差別を挙げるとともに、王道の代わりに霸道が、精神的な道徳の代わりに形式的な威信が、道徳や学識の代わりに財産が、大手を振る世相を慨嘆した。金星圭は、悪法・税金負担・差別待遇といった植民地民衆として感じる問題の根底には、儒教的な旧道徳の崩壊という、より大きな問題が存在して

いると考えていたのであろう。韓国併合後の10年を総括する項目についても、答弁の骨子は「物質的、形式的幸福は旧韓に比べて増進」したが、「精神的、実質的幸福は併合後10年の間で徐々に退歩」したというものであった。金星圭は「精神的、実質的幸福」を実現するためには、何にもまして儒教を尊重し旧礼を復活させることが重要であると考え、要求項目の最初に盛り込んだのであった<sup>5</sup>。もっとも、このような考えを有していたのは金星圭だけではなかった。3・1運動当時、植民地の現実よりも儒教的格律の没落という点に重きをおいて問題の根源を探り出そうとする動きは、儒林層を中心に広く見られた。長幼の序を取り戻さなければならない、書堂教育を認め漢文の素養を養わなければならない、といった意見はさまざまな地域の世論調査で見られた<sup>6</sup>。

彼自身、改革官僚の出身であったという点を考えると、晩年の金星圭がこのように儒教的徳目を重視する方向に傾いていったという事実は、意外といえ意外である。金星圭は1880年代初めに李尚嬾<sup>イサンヒョク</sup>〔朝鮮時代の算学者。字は志叟。著書に『翼算』『算術管見』など〕のもとで数学や測量学を学び、日本語や英語を中心に数か国語の知識を磨き、鉱務局主事、欧州派遣大使の書記官などの実務職を務めた後、1895年から1899年までは高敞<sup>コチャン</sup>および長城<sup>チャンソン</sup>地域の郡守を、1904年には江原道観察使をそれぞれ歴任した。1890年代から1900年代にかけて、かつての儒学知識人と新たな専門的な技術をもった知識人との間で葛藤や競争が繰り返されてきたとするならば、金星圭は明らかに専門的な技術をもった知識人の1人であった。1891年、大科初試〔科挙の第一次試験〕に合格したと履歴書には書いてあるが<sup>7</sup>、科挙の合格者名簿である『司馬榜目』では名前を確認できず、履歴書の内容からも科挙

5 「騒擾答案」『草亭先生文集』巻6（Ⅱ：181～189）

6 정병욱 「3・1운동과 학력주의의 제도화」 박헌호, 류준필 엮음 『1919년 3월 1일에 묻다』 성균관대학교출판부, 2009, p.386.

7 「附録從宦録」巻12（Ⅲ：395）

試験が大きな影響を及ぼしていたとは考えられない。鉱務局主事や外交官随行員などの実務職を遍歴していた金星圭に、本格的に官職進出の機会が開かれたのは甲午改革以後である。金祐鎮が「草心亭実記」のなかで記しているように、甲午改革の首謀者のうちには金星圭と普段から親交の深い友人が相当数含まれており、彼らは何度も京官〔朝鮮時代、漢城にあった官庁の役人の総称〕になることをすすめたが、金星圭は頑<sup>かたく</sup>なにそれを拒んでいた。全羅南道量務監吏〔各道で測量事業を担当していた官庁の最高責任者〕、<sup>ムアン</sup>務安裁判所判事、忠清道觀察使など、実際に金星圭が依頼を断った職は少なくなかったと思われる。1904年、江原道觀察使として再度官途に就いたが、これは忠清道觀察使となることを拒むや、今度は江原に場所を変えて觀察使となることを懇々と要請されたため、やむを得ず就いたものであったと、「草心亭実記」では述べられている。江原道觀察使に就任すると、<sup>チュンチョン</sup>春川にとどまったのはわずか10日余りであり、残りの40日余りは2,000里〔朝鮮里は400メートル〕余りを強行軍でめぐりながら業務を行い、102件の事務を処理したといわれるが、このエピソードからは彼がいかに精力的な業務能力の持ち主であったかが分かる。それほどまでに彼は意欲的な新進官僚であったのであろう<sup>8</sup>。觀察使時代に自ら作成した「路程日記」を見ると、金星圭は病に苦しめられながらも、1日100里を前進し、至るところで民の声に耳を傾け、不正をはたらく役人を懲らしめていたことが分かる。このように政事を正すという義気に溢れていたことがあだとなり、金星圭は觀察使就任からわずか50日余りで、不当な名目により觀察使の職を追われることになった。これは、彼としては手痛い経験であったであろう。もっとも、このような運命をたどったのは金星圭ばかりでなかった。政治勢力間の軋轢や腐敗に加えて、日本の介入までもが絡まりあい、官職の交替が頻繁に行われていた時期であった。すでに10年以上前から、官途に対して幻

<sup>8</sup> 「草心亭実記」『草亭先生文集』巻12（Ⅲ：369）

滅を覚えていた金星圭はこれにより官途への思いを完全に断ち切った。

「草心亭実記」には「正しい道を守り、屈しないため〔守正不屈〕勇退したと記されている。

金星圭が世情に疎い知識人でなかったことは、彼が官職から追われた後の歩みを見ても明らかである。金星圭の生涯のうち解明が最も難しいのは、蓄財の過程である。1924年の祥星合名会社設立当時、納入資金だけでも20万円に達していたが<sup>9</sup>、それ以外に10万円規模の報恩社を設立し、また残りの財産もあったであろうから、金星圭が持っていた財産は相当な額に上ったわけである。彼はそのような規模の財産を短い期間でどのように蓄積したのであろうか。慶尚北道聞慶<sup>ムンギョン</sup>出身の金星圭が全羅南道の長城に移住したのは1894年8月であり（Ⅲ：212）、長城郡守の職にあったのは1897年から1899年までである。1897年には生母の墓を聞慶から長城に移しているから、長城一帯を新たな根拠地にしようという心づもりは早くからしていたものと思われるが<sup>10</sup>、そうだとした場合でも長城に移り住んでから祥星合名会社を設立するまでは30年もかかっている。これについては出発点と考えられる資料が数点残されている。「草心亭実記」によれば、1897年、生母の墓の周辺に松1万株を植え、墓位田を購入したのが土地購入の第一歩であったという（Ⅲ：350）。このほかに金星圭の自筆の干拓事業を記念する文章や<sup>11</sup>、1914年に長城の黄龍<sup>ファンリョン</sup>湫の植林事業をめぐって裁判を繰り広げたことに関する記述も残っている<sup>12</sup>。また、金祐鎮の弟哲鎮<sup>チョルジン</sup>の家で1930

<sup>9</sup> 金星圭名義の不動産を息子に分与した後、登記価格を標準にする方式であった（「祥星合名会社定款」『草亭先生文集』巻3（Ⅰ：285））

<sup>10</sup> 当初、尹雄烈は光州への赴任を提案していたが、赴任地を長城に変更することを申請した。

<sup>11</sup> 法律新聞社申連洙氏の所蔵本。木浦南岳地域の干拓地には金星圭の次男金哲鎮の役徳碑が残っているといわれる。報恩社の小作人の名義で1941年に建てられたものである。

<sup>12</sup> 「再従祖父下書」（1914.07）『雲章要訣』



年代に作成された小作帳簿も残っている<sup>13</sup>。これらの資料に記された土地の所在地を確認していけば蓄財の過程を明らかにすることができるであろう。これについては専門家による本格的な研究が待たれるところであるが、おそらく金星圭は干拓事業により大規模な土地を獲得し<sup>14</sup>、以後、土地拡張や植林事業などを通じて蓄財していったものと思われる。朝鮮時代末期の地方官については、職権を濫用して収奪や蓄財を行っていたと一般に言われるが、後日、金祐鎮が父の特徴として天才・精力とともに「高潔で清廉な人格」を挙げていることからすると、少なくとも露骨な職権濫用を通じて財をなしたとは考えにくい。財をなす基盤は当然に備えていたであろうが、以後、湖南〔全羅南北道一帯〕屈指の大地主になるまでには彼独自の実業に対する志と実務能力とが決定的な影響を及ぼしていたものと思われる。

金星圭は生涯にわたって農業を強調し続けた。彼が建てた東山（先憂<sup>トクサン</sup>）義塾では月に4日ずつ田畑を耕さなければならず<sup>15</sup>、彼が子孫に命じた道も農業であった。彼は湖南銀行や木浦持株会社など工業金融分野にも投資していたが、財産の根幹は土地であったと思われる。1911年、視察団に交じって日本を訪問した後は、農業や植林業に対するそれまでの思いをさらに強くした。金星圭は「日本を観光したるとき農林業の天下の根本なることを詳細に見」<sup>16</sup>、以後「この世界の事業は専ら農業に在」ることを確信したという<sup>17</sup>。後日、書翰集『雲章要訣』を編集した従孫は、金星圭の援

<sup>13</sup> これについては、박이준「일제하 지주가의 소작관행 연구」(『한국독립운동사연구』22호, 2004)に詳しい。

<sup>14</sup> 近隣地域の仁村・金性洙家の財産蓄積過程は参照に値する。高敞地域の金性洙家が所有していた土地の大部分は、総督府からの補助金で行った干拓によって獲得したものである。カーター・J. エッカート『日本帝国の申し子：高敞の金一族と韓国資本主義の植民地起源 1876～1945』草思社、2004年、43頁。

<sup>15</sup> 「東山義塾課程添入件」『草亭先生文集』巻6(Ⅱ：150～151)

<sup>16</sup> 「在光州留学時木浦再従祖父主下書」(1911.06.15)『雲章要訣』

<sup>17</sup> 「在光州留学時木浦再従祖父主下書」(1911.06.17)『雲章要訣』

助を受けて光州農学校を卒業しており、甥の鍾鎮も同様の経路をたどっている。1912年には次男の哲鎮を実業学校に入学させ<sup>18</sup>、1915年には祐鎮と哲鎮とを日本の熊本農業学校に進学させている。このように金星圭の徹底した農業重視策は、彼が青年時代から接していた殖産興業論に由来するものであろうが、1910年代の総督府政策のもと新たな意味で屈折した道でもあった。政治・言論・教育において朝鮮人の進出できる経路を遮断した植民地権力は、実業分野でのみわずかに朝鮮人の成功を後押し<sup>19</sup>、農業・商業・鉱業などの分野で近代的かつ植民的な資本の蓄積を支援していた。朝鮮人大地主にとって1914年から1920年にかけては繁栄の時期であったといわれるが<sup>20</sup>、この時期、金星圭も躍進のチャンスをつかんでいたものと思われる。植民地化以後1919年までの間に「物質的、形式的幸福は旧韓に比べて増進」したという金星圭の答弁は、贅辞ではなかったであろう。彼は躍進のチャンスをつかむと同時に、植民地権力を「修正」しうる方向で儒学の座標もつかんでいたのではないだろうか。金星圭が選んだ婚班〔婚姻を媒介として血縁集団の間に形成された社会的関係〕も、民族と帝国との間、実業と儒学との間で綱渡りをする、自らの位置を絶妙に示している。長男祐鎮のため全羅南道地域の著名な学者である雲藍・鄭鳳鉉の娘を、次男哲鎮のため実務能力を通じて身を立えた元軍部大臣の経農・権重顕の娘を、それぞれ嫁として迎え入れたのである。金星圭は、伝統的な学者と

<sup>18</sup> 祐鎮はこの頃、数か月間、腫物で苦しめられており、そのため進学もできなかったようである（『雲章要訣』）。金祐鎮は1913年、日本人学校である木浦公立尋常高等小学校高等科1年を修了したとされているが、2人の息子をそれぞれ別の学校に通わせただのか、高等小学校を「実業学校」と呼んでいるのかははっきりしない。

<sup>19</sup> 総督府が朝鮮人を全面的に支援していたわけではないことはいうまでもない。また、日本人と競合する「大成功」ではなく、自身の地域や分野で自立する程度の「小成功」のみを奨励していたという社会的状況については、권보드래『1910년대, 풍문의 시대를 읽다』(동국대학교출판부, 2008)を参照。

<sup>20</sup> カーター .J. エッカート、前掲書、41頁。

清教徒的な新興ブルジョアジーとを、経済的かつ倫理的に統一した人物<sup>21</sup>、すなわちそれらの間の分裂や葛藤のドラマを縫合するのに生涯をささげた人物であった。

### 3. 規律の行方、国家から家門へ

金祐鎮は素直な息子であった。父の教えを固く信じていた。1915年<sup>22</sup>、農業学校に入学するため熊本に渡った金祐鎮が親戚の金鍾鎮に宛てた手紙からは、この頃までは父の農業重視論を何の疑いもなく受け入れていたことが分かる<sup>23</sup>。入学試験の準備をしながら私立学校（精華専修）に通っていたこの時期、金祐鎮は木浦よりも栄えていた熊本の日常について「僕は常々、都会は非常に不馴れであり、義に明るい百姓たちの住む田舎のほうがいいと思っている」と記している<sup>24</sup>。鋤夫であれ、工場の人であれ、店番であれ、彼にとっては気の毒な立場の人間にすぎなかった。人間は土から生まれ、土に生き、土から生まれたものを食べ、死んでもなお土に戻る存在であるため、農夫こそ「神に仕える存在」であり「人間に施された自然」であった（I：368）。金鍾鎮が農業学校に通いながらも、怏々にして楽しんでいない様子を感じ取った金祐鎮は、金鍾鎮に考えを改めることを丁寧にすすめた。「嗚呼、兄よ、農を賤しく思うことなかれ。現今の我が民族に、他の商者であるとか、学者であるとか、工者であるとか云々の議論を信じることなかれ、望むことなかれ」（I：371）。「このように嫌な話」を金鍾鎮

<sup>21</sup> 윤진현 『조선 시민국의 구상과 탈계몽의 문학 : 수산 김우진의 생애와 문학』 창작과 비평사, 2010, p.69.

<sup>22</sup> 『草亭先生文集』では丙辰年、すなわち1916年の正月に書かれた手紙となっている。検討を要する。

<sup>23</sup> 양승국 「극작가 김우진 재론」 (한국극예술학회 편 『김우진』 연극과 인간, 2010, p.56) でも、金祐鎮が金鍾鎮に送った手紙を用いて、同様の結論を下している。

<sup>24</sup> 「附祐鎮在熊本答宗鎮書」 『草亭先生文集』 卷4 (I：367)

に伝えるまでに、約1年を要したという金祐鎮の手紙は「農を崇める幾許の経歴」を誓う忠誠心に満ちている。農業学校在学中、金祐鎮が作成した『農場日誌』も、その日その日の実習や農場巡視の内容が細かい字でぎっしりと記されている。数か月単位で点検印が押されているところをみると、『農場日誌』が提出用の課題であったことは明らかであるが、一所懸命描いた挿絵や溢れんばかりの分量からは、彼が誠実に教育に臨んでいたことが分かる。「小説や雑誌などの書物に目をくれてはならない」という父親の指示<sup>25</sup>にも従順にしたがっていたのであろう。しかし、1917年になると『農場日誌』の記録はなおざりになっていき、数日おきに空白も見られる

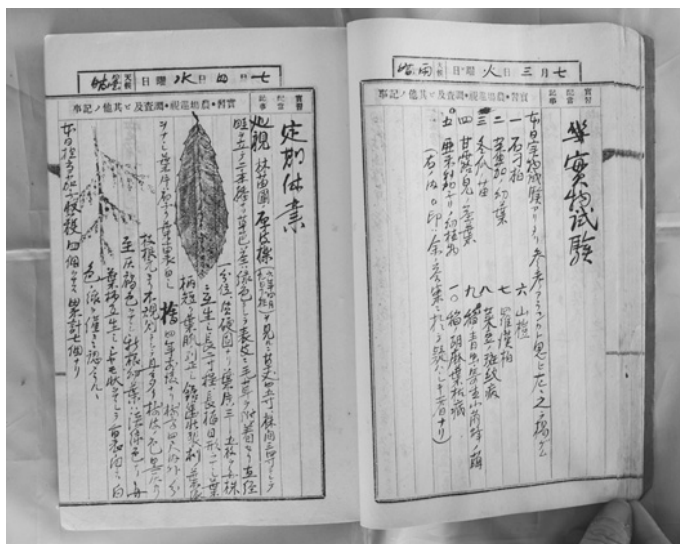


図1 金祐鎮の農場日誌

熊本農業学校在学中に金祐鎮が作成した農場日誌の一部。農場で観察実習した内容を記した日誌であり、定期的に担当教授の点検を受けていた。

<sup>25</sup>「在従祖父戒子遊学書牘」『雲章要訣』

ようになるなど、変化のきざしが見られるようになるが、誠実な農学徒であった金祐鎮がなぜ大学進学を心に決めたのかは分からない。金祐鎮は1918年初めの農業学校卒業直後、東京に移り住み、早稲田大学高等予科に入学し、2年後英文科専攻に進学した<sup>26</sup>。

後日、家出をした後、彼は「ただ熊本から文科大学に行ったとき」を除いて、「これまで僕が親父の言うことに逆らったことが一度だってあろうか」と記しているが<sup>27</sup>、進学問題をめぐって金星圭・祐鎮父子の間には激烈な衝突があったものと思われる。金星圭側にも金祐鎮側にも進学に関する直接的な記録は残っていない。そのため詳しい事情は分からないが、金祐鎮の進学背景には、彼のそれまでにない自己主張と、金星圭の妥協的な態度とがあったであろう。長子は普通学校と農業学校の過程を終えたら「家事に従事」させなければならないというのが、金星圭の平素の考えであったことを考えると、金星圭としては苦渋の決断をしたわけである<sup>28</sup>。金星圭が家のなかで独裁的に規律を行使していたことは明らかである。息子が熊本農業学校に留学していた頃に送った書翰はよく知られているが<sup>29</sup>、書信をやりとりする際の形式から、文体、用紙、手紙の保管方法に至るまで細かく指示するような徹頭徹尾のスタイルは、金星圭の生涯を通じて、あらゆる関係において貫き通されていた。何よりも彼は自分と近い関係にある人物を細かく統制することに驚くほどの集中力を発揮している。このこ

---

<sup>26</sup> 정대성 「새로운 자료로 살펴본 와세다 대학 시절의 김우진」 『한국극예술연구』 25호, 2007, pp.436~437.

<sup>27</sup> 「A Protesto」 서연호, 홍창수 편 『金祐鎮全集』 1, 연극과 인간, 2000, p.422. 『金祐鎮全集』には、1983年に전예원から出版されたものと、2000年に연극과 인간から出版されたものの2種類がある。以下で引用する『金祐鎮全集』のうち、特に引用先を明記していないものは後者からの引用である。

<sup>28</sup> 「寄宋胥錫祚書」 『草亭先生文集』 卷4 (1 : 374)。大学卒業後、祐鎮、哲鎮兄弟が常に「文学士」「法学士」と呼ばれていたところを見ると、大学進学を一種の学歴投資として用いるようになったとも考えられる。

<sup>29</sup> 詳しい内容については、윤진현, 前掲書, pp.70~71を参照。

とは従孫が編集した書翰帖の約3分の1を金星圭の手紙が占めていることからよく分かる。金星圭は光州に留学している従孫に、下宿についての事細かな報告を求め<sup>30</sup>、食費や薬代などの支出をその都度記録して送るよう命じていた<sup>31</sup>。また、衣服は勤儉節約を、洗濯は清潔を第一とするが、帽子は麦わら帽がよく、靴は洋靴がよいというように、衣服や洗濯についても細かく指示を出していた<sup>32</sup>。学費を援助するだけの親族に対してさえ、このような調子であったから、まして息子や兄弟に対してどのようであったのかは想像に難くない。

金祐鎮・哲鎮・翼鎮<sup>イクチン</sup>兄弟は幼いときから何倍も厳しい規律のなかで育った。学期中には父が建てた義塾で厳格な時間割にしたがって勉強をしなければならず、長期休業になれば「夏期休業中における学生習業規則」に従わなければならなかった。金星圭が作成した長期休業中の日課表によれば、1日が1時間から3時間単位で区切られ、時間別の課業を一条乱れずこなしていかなければならなかった。漢文10回、日本語10回、朝鮮語3回というようなやり方で、その日復習すべき内容を1つの単位とし、朝6時に起きてから夜9時に寝るまで時間帯別に復習単位を1回から3回ずつ繰り返すのが基本であった。朝起きて、顔を洗い、掃除をした後、復習を1回し、8時に朝食を食べた後、10時までは日記を書いたり習字の練習をしたりし、10時から11時までは復習を2回し、昼食後12時から午後3時までの昼休みには漢詩を1篇作り、3時から6時までは復習を3回するという、息つく暇もないスケジュールであった。6時に夕食をとり運動をした後、ようやくつかの間の休憩時間が与えられた。このように1週間を過ごした結果は、毎週日曜日に行われる暗唱によって等級がつけられて評価された<sup>33</sup>。しかし、この

---

<sup>30</sup> 1911.07.16 『雲章要訣』

<sup>31</sup> 1912.09.04 『雲章要訣』

<sup>32</sup> 1912.06.25 『雲章要訣』

<sup>33</sup> 「夏期放學中学生習業規則」『草亭先生文集』巻6（Ⅱ：160～162）

ような厳しい日常が息子たちの真に自発的な服従によって維持されることは、おそらく不可能であったであろう。金祐鎮は、家出をした頃に書いた戯曲「難破」のなかで「詩人」の母に「お前は小さいときに父さんからキセルの管でふくらはぎを引っぱたかれて気を失ったのを忘れたのかい」<sup>34</sup>というセリフを言わせている。文学テキストのなかでの叙述ではあるが、このセリフからは自然と厳父金星圭の姿が連想される。また、「詩人」の父にも「わしがまだ血気盛んだった頃、この手でぶん殴られなかった日があるか」というセリフを言わせているが、兄弟のなかでも特に長男の金祐鎮は嫌というほど父から威圧的な訓育を受けていた。

金星圭が施していた威圧的な訓育の目的はどこにあったのであろうか。少なくとも息子たちに出世や立身を望んでのことではなかったと思われる。早くから彼自身、官途ではなく実業の世界に進むことを決意し、地域を拠点としながら、国家や民族ではなく家門や親族に対する「報恩」という道を選んでいった。官途での成功を夢見るには「時勢が許さぬ」という判断は、1910年以後も、また子孫に対しても一貫していた。金星圭は直系傍系を問わず、子孫全員に対して農学を学んで実業に従事する生き方を命じ、その里程標として民族でも個人でもない家門を据えた。父母に対する、とりわけ生母である順興<sup>スズノブ</sup>安氏を思う気持ちは、金星圭の後半生を貫いていた召命意識の源泉であり、金星圭の規律の最終審級には孝という価値が置かれていた。例えば、息子たちに酒とたばこを禁じたときの状況を見ても、このことは明らかである。金祐鎮が16歳になる年の正月のことであった。金星圭は数か月前、断酒を決意していたが、病のためやむなく誓いを破らなければならなくなった。断酒を決めた際、彼は生母の祠堂にその旨を告げていた。そのため、誓いを破る際も生母の祠堂にその旨を告げなければならなかった。そこで金星圭は息子の祐鎮と哲鎮を自身の前に立たせ、位牌の

---

<sup>34</sup>「難破」『金祐鎮全集』1, p.77.



前に立った。父が果たせなかった約束を息子たちに果たさせようとしたわけである。そこに甥の金夏鎮も合流して、3名は「父は春秋30歳まで酒と煙草に近寄りませんでした。それゆえ私たちも生涯酒と煙草には近寄らず、30歳になるまでは特に謹慎し、飲酒、喫煙を決していたしません」ことを誓った<sup>35</sup>。酒とたばこを禁ずる規律を定めれば済むことを、祠堂に告げて誓いを立てるという封建的な儀礼の形式をわざわざとったのである。このように金星圭は、訓育や規律に「報恩主義」の色彩を施そうとしたのであった。

金星圭にとって生母の記憶は、文字通り生涯忘れることのできない生々しい傷跡であった。「難破」のなかで「詩人」の父は、亡くなった生母、すなわち彼女の位牌が現れるや「駆けていきそれを掴みながらぼろぼろと涙を流し」、「母さん！この不孝息子を、母さんに天をも突き刺すような恨み<sup>ハン</sup>を抱かせた、この不孝息子を！」と泣き叫んでいるが<sup>36</sup>、この場面は必ずしも演劇的な誇張ばかりではなかったと思われる。金星圭の生き方の中心には当初から生母が据えられていたが、欧州5か国の大使であった趙臣熙<sup>チョソンヒ</sup>に随行して香港に滞在していた際に<sup>37</sup>生母の訃報に接してからは、そのような偏向がさらに強まった。生涯金星圭につきまどっていたうわさの1つに、若い頃ハンセン病に罹ったが、すさまじいほどの摂生により病を克服したというものがある。これに関していくつかの文章には、1884年に彼がハンセン病にかかってから2年後に回復するまでの間の事情が「慈愛」と「孝」

<sup>35</sup>「酒草破戒家廟告由文」『草亭先生文集』巻5（Ⅱ：48）

<sup>36</sup>「難破」『金祐鎮全集』1, p.78.

<sup>37</sup>朝鮮政府は、1887年駐米大使に朴定陽を、欧州5か国大使に趙臣熙をそれぞれ任命したが、清の強力な反対を受け、計画を変更しなければならなかった。朴定陽はアメリカ行きを強行し、その後帰国したが、趙臣熙は赴任途中の香港に15か月間とどまった後、そのまま帰国した。詳しい記録は残っていないが、後に金星圭が「時勢が許さぬ」と判断して、官途をあきらめたという話は『草亭先生文集』のいたるところで見られる。彼が官途をあきらめたのは、朝鮮の現状に絶望した上、母の孤独な死に挫折感を覚えたためではなかったかと思われる。



とを軸に再構成されて掲載されている。当時、22歳であった金星圭は、ハンセン病を治療するためには徹底した禁欲生活を送らなければならないという診断を受けた。麦飯だけを食べ、白米は1粒たりとも摂取してはならず、魚や肉はもとより、一切の調味料を口にしてはならず、性交も絶対に避けなければならないというものであった。もともと息子に対し並々ならぬ慈愛をもって接していた生母は、はなはだたちの悪い病にかかってしまった息子を手厚く見守った。男盛りの年で病魔に冒された星圭も辛い禁欲生活をひとえに父母に対する思いで耐え抜いた。「米飯が食べたいか。父を思い、母を思え(…)」。金星圭は禁忌事項ひとつひとつに「父を思い、母を思え」という呪文を書いておくことで、先の見えない闘病生活を耐えきることができたという。父もまた、年老いてから授かった息子を愛していたが、母子の情にはひしひしと胸に迫るものがあった。



図2 香港滞在中の金星圭

欧州5か国全権大使に任命された趙臣熙に随行して、香港に滞在していた頃に撮った写真。清の執拗な反対により、任地には赴任できないまま、約1年間滞在了した後、帰国した。

ここで、金星圭の出生をめぐる論争について見ておきたい。主に金祐鎮の父として知られてきた金星圭については、早くから庶生であることが指摘されてきた<sup>38</sup>。豊川<sup>ブンチヨン</sup> 県監を務め、改革案である「太平五策」を提案したことで名を残した、磊西<sup>ネソ</sup>・金炳<sup>キムビョンウク</sup> 昱が老年に授かった庶子であるという見解である<sup>39</sup>。この見解は金祐鎮が遺したテキストの細部とも一致し、これまで広く認められてきたが、約10年前、金星圭が庶子であるというのは「うわさ」ないし「虚構」にすぎず、族譜に照らし合わせてみると彼が嫡子であることは明らかであるという主張が提起された<sup>40</sup>。近年ではこれら2つの見解を折衷して「法的には嫡子、家門内の感覚では庶子」という見解が提案されている。もともと妾であった金星圭の生母が彼を産んだ後、正妻に昇格したという見解である<sup>41</sup>。これまでの研究では扱われてこなかった資料を参照しても、この折衷案が妥当であると思われる。先行研究においてすでに論証されている内容であるため省略するが、金星圭には彼が生まれる前に亡くなった長兄がただけであり、事実上の一人息子として父親の愛情を一身に受けて育った。しかし、彼は庶生であり、生涯その烙印とともに生きなければならなかったものと思われる。後日、孫が不思議がつているように「主に四書三経を学ぶとき」その代わりに数学や測量学を学び実務官僚となったこと<sup>42</sup>、出生地の聞慶を捨てて長城に新たな基盤を作ったこと、長城に生母の祠堂を建てたことなどは、すべて金星圭が庶生であったという点を考えなければ、理解することが難しい。金星圭には長兄

<sup>38</sup> 김중철 『산태지』 연구』 한국극예술학회 편 『한국현대극작가론1 : 김우진』 태학사, 1996. 改革官僚としての金星圭に注目した研究としては、김용섭 「광무양전의 사상기반 : 무안감리 김성규의 사회경제론」(『아세아연구』 15권4호, 1972) などがある。

<sup>39</sup> 金炳昱については、노대환 「개항기 지식인 김병욱의 시세인식과 부강론」(『한국문화』 27호, 2001) を参照。

<sup>40</sup> 양승국, 前掲論文, pp.13~15.

<sup>41</sup> 윤진현, 前掲書, p.67.

<sup>42</sup> 김방한 『한 언어학자의 회상』 민음사, 1996, p.21.

が残した血筋、すなわち一家の従孫に当たる年老いた甥が1人いたが、金  
瀬鎮ホジンというこの甥がどれほど彼を冷遇していたかについては、枚挙に暇が  
ないほどの傍証資料がある。「難破」によれば瀬鎮は、星圭やその生母を  
「自分の家の犬よりも蔑視」（全集1：78）しており、没落の一途をたどる  
自分自身とは反対に、勝利を収めたかのような歳月を送る星圭を目にしなが  
らも、彼を無視しざげすむ態度を改めなかった。

金星圭の恨みは深かったものと思われる。生母が亡くなってから数十年  
が過ぎても、彼にとって母の記憶は常に「血と涙をそそる」傷跡であった。  
還暦を迎えた日、わざわざ帰国してきた息子たちを前に、生母への思いが  
ぬぐえないといって、還暦祝いの席を拒んだこともあった。この日、生母  
を思いながら書いた七言古詩は『草亭先生文集』にも収録されている。彼  
自身この詩を自作詩のなかで3本の指に入る名篇であると自負していたた  
めか、祐鎮が詩を印刷した後、いきさつを説明する文章を付け加えて親し  
い知人に書信で送ったりもしていた。金星圭はこの詩のなかではるか遠い  
昔の幼少時代を回想している。秋の日、柿をもぎ、栗を拾って洗い、それ  
を盆の上ののせて差し出すと、父と母が瞳いっぱい笑みを浮かべていた  
記憶。釣りでとってきた魚を差し出すと、母が汁物に仕立て、父と向かい  
あって食べるようにしてくれた記憶。10代初めて時間が止まっているよう  
なこれらの場面のなかで、父母は「夜、寝る頃になると寝床のそばで頭を  
なでくれる〔夜睡床辺須摩頂〕慈愛に満ちた存在であり、「朝起きれば埃  
を払って服を差し出してくれる〔朝起払塵進衣裘〕献身的な守護者として  
描かれている。厳格な訓育を施す代わりに温かく見守ってくれる存在とし  
て記憶される60代の父と30代の母は、瀬鎮をはじめとする一族の恐ろしい  
視線とは反対に、金星圭にとって生涯忘れることのできない完璧な瞬間を  
構成していた。もっとも、このようなエピソードだけで「報恩主義」とい  
う独特な名称をもつ理念が形成されたわけではないであろう。かつて新進  
改革官僚であった金星圭は、1900年代にはすでに国家や民族に対する意識

を副次化する道を歩んでいた。植民地民衆の1人である金星圭にも、「李朝の遺民」としてのアイデンティティはあった。しかし、彼は「国がすでに滅びているというのに、人に恵みを施すことなど不可能である〔国之亡既不能有一毫援助〕」という態度を堅持し<sup>43</sup>、忠ではなく孝友にこだわった。生母に対する並々ならぬ思いということもあつたであろうが、忠よりも孝友にふさわしい時代でもあつた。儒学の理念を誤用（appropriation）しながら植民地という現実に適応するという方法は、植民地期、とりわけその初期において、多くの人々によって用いられていたものと思われる。例えば、族譜の発行、詩社の結成、作詩行事の開催などに見られる、1910年代の儒学ないし漢学の一時的な活況は、儒学本来の理念を切り取るなかで見られた現象であり、このような時代にあつて「国家や民族ではなく家門」という主張は、最も説得力を有していた。

#### 4. 家門の確立、新時代の脅威

1894年8月、金星圭は聞慶から長城に移り住んだが、その約2年後、生母の墓を長城に移した。移葬には17名の労働者のほかに、馬3匹、馬夫2名を動員し、それまで3年間貯めておいた財産をすべて使い果たしたといわれるほど、大きな経済的負担を伴うものであつた。『緬礼日記』によれば、慶尚北道の聞慶から全羅南道の長城まで、今日でもたやすく往来することのできない距離を進むには丸1か月を要したという。また、「難破」によれば、金星圭は移葬の無事を祈り丸1年の間禁欲生活を送つたという（全集1：75）。金祐鎮はその直後に授かつた息子であつた。35歳で授かつた初めての息子であつただけに、彼に対する金星圭の期待には並々ならぬものがあつた。息子は家門の新たな歴史を確立するうえで礎石となるべき存在であつ

---

<sup>43</sup>「上安東金氏大同譜重刊会中書」『草亭先生文集』巻4（1：390）

た。また、生母の墓を移したのも、業の果てのことだったわけではなく、業の始まりを意味していた。もちろん、生母の意志を継ぐという意味もあるにはあった。金星圭は彼女のかねての願いどおり外祖父母の墓位田を購入し、石碑を建て、早くにこの世を去った妹の玉賢<sup>オツキヨ</sup>の墓も、生母の墓を移すときに一緒に移した<sup>44</sup>。しかし、それだけではなかった。嶺南<sup>ヨナム</sup>〔慶尚南北道一帯〕から湖南に移り住むという冒険を敢えてした金星圭は、次いで安東金氏に属する親戚を長城や木浦一帯に積極的に呼び寄せた。19世紀半ばまで、聞慶のとある村に屋根を連ねて暮らしていた6兄弟の子孫、すなわち半世紀が過ぎ相当な規模に成長した塘翁公派<sup>タンオンゴンパ</sup>一門の成員に、職を斡旋し、生活費を援助しながら、長城や木浦一帯に移り住むことをすすめていたのである<sup>45</sup>。

後日、金星圭は長城や木浦一帯に定着した親族を2つに分け、自身と金<sup>キム</sup>玫圭<sup>ミンギョ</sup>とを「自身で財産を賄っており、親族間の不都合な旧習を避けるため」先に移り住んだ側に、金<sup>キム</sup>奉圭<sup>ボンギョ</sup>・金<sup>キム</sup>三圭<sup>サムギョ</sup>・金<sup>キム</sup>昌鎮<sup>チャンジン</sup>・金<sup>キム</sup>承漢<sup>スンハン</sup>を「所有していた財産が尽き果て生活が困難であるため、星圭の招集により」移り住んだ側に分類している。1910年代半ばに入り、男性代表12名総家族数48名という相当な規模を誇るようになったこの「湖南一円の安東金氏」について、金星圭はややアンビバレントな態度を示している。自分の財産に頼ることを嫌悪したり警戒したりする一方で、一族の繁栄を自身のことのように思う態度を示していたのである。1914年に作成した「宗中公蹟」の付録にある誓約書では、第1条として「親族の財産について道理に背く考えは頭から断ち切ることを」、第2条として「親族一門全体に対し、自身を捧げる

<sup>44</sup> 庶出としての大きな悲しみを背負っていた人生には、妹の記憶も絡んでいると思われる。姉の墓誌銘で「黄家之蔑義絶倫」を非難しているところをみると、黄氏の家に嫁いだ後、やるせない最期を迎えたのではないかと思われる。（「祭亡妹端人墓文」『草亭先生文集』巻5（Ⅱ：63））。

<sup>45</sup> 「草心亭実記」『草亭先生文集』巻12（Ⅲ：374～375）

精神を養うこと」を規定している。1916年の契約書にはさらに具体的な規定が設けられている。ここでは第1条で「星圭は今日より、親族各人に財産を与えることをやめると決心したこと」が、第2条で「今日からは、親族各人も星圭の財産に頼る気持ちを永遠に断ち切ること」が定められていた。このような規定が設けられるほど、「生活困難」のため木浦や長城一帯に移り住んだ親族は、金星圭の財力に大きく頼っていたものと思われる<sup>46</sup>。下の表は「宗中公蹟」をもとに長城や木浦一帯に移り住んだ安東金氏一族を再構成したものである。同地域に移り住んだ安東金氏一族は、金星圭家族のほかに、計7家族41名であった。

表1

姓名	移住時期	移住時の家族数	1916年の家族数	備考
金星圭	1894年8月	5	15	
金承漢	1897年2月	2	7	
金玟圭	1900年2月	2	5	
<small>キム ハジ</small> 金夏鎮	1905年9月	1	3	金星圭の家に下宿、1906年から1907年まで日本に留学、1916年に独立
<small>キムボンギョ</small> 金鳳圭	1907年3月	2	4	
金三圭	1908年4月	2	3	
<small>キムトツキョ</small> 金徳圭	1912年3月	4	4	

このように金星圭は新たな地域で新たな根拠地づくりに取りかかっていたが、庶出としての影はすぐには消えなかった。<sup>チヨンギョ</sup>鄭喬の『大韓季年史』にも記されているように、一族の宗孫である甥の瀨鎮の挑発が続いていた

<sup>46</sup>「大正5年丙辰陰8月初6日第3回全南寓居安東金氏都正府君派門会時契約書」『草亭先生文集』巻11

めである。長城や木浦一帯に移り住んだ一族が相当な勢いをなした1910年代半ば、金灑鎮の家は放蕩と没落とを重ねていたが、それにもかかわらず彼の挑発はやむことなく続いていた。1915年には灑鎮が借金980円を返済するため、息子の朝漢チヨハンを通じて祖先の墓がある山2筆分を星圭に渡した。数度にわたって丁重に願い出たため、金星圭と金灑鎮とは朝漢を間において売買契約を結び、星圭は手数料を含め1,050円余りを灑鎮に支払い、祖先の墓がある山を預かったという。しかし、その後も「灑鎮氏はその叔父を蔑視し、すでに売り渡した(…)山林を数度盗伐」したため、金星圭は裁判所に灑鎮を告訴するという過激な方法で対処した。勝訴後、金星圭は林野査定を通じて所有権をさらに明確にした。金星圭が事あるごとに法を強調していた背景には、この事件も大きく影響しているはずである。また、1934年に作成された「塘翁金氏門中第2回臨時総会決議案第2号」は、第9款において「宗孫と支孫とを問わず、故意に犯した罪悪については法律により制裁を断行すること」を規定している。「現今のような終局の世においては、常に守るべき人倫の道は途絶え、人々は利欲に溺れ、人の面を被った禽獣の心を持つ者が闊歩するばかり」であるため制定したというこの定款の根底に、金灑鎮の事件があったことは明らかである。というのも、「特殊大罪悪」として規定された犯罪を実際に企てた人物として灑鎮が言及されているためである。金星圭は封建的な儒学の理念を擁護する一方で、「法」の普遍性にも信頼をおいていた。そのため「朝鮮の古き慣習」を信じる一方で、何の憚りもなく罪を犯す灑鎮のような輩は法で治めなければならないと信じていたのである<sup>47</sup>。このように近代法を尊重していたという点にも、金星圭の改革的な側面はよく表れているが、蓄財の過程でも近代法についての知識や運営の要領は大きく役立っていた。

1934年の決議案の説明によれば、1920年4月当時74歳であった金灑鎮は

---

<sup>47</sup>「心の跡」『金祐鎮全集』2, p.441.

「叔父である星圭の金銭を騙し取る目的で」、祖先の墓に水が溜まっているといい、墓を掘り返して遺骨を盗もうとした。つまり彼は、金星圭ならば祖先の遺骨を取り戻すのに金を惜しまないであろうと見て、このような行為に及んだのである。たしかに、金瀨鎮が墓を掘り返したのは事実であったが、自分自身の祖先でもある人物の遺骨を彼が取引の対象にしようとしたということが果たして事実であるのか、その点は疑問である。これに関して『大韓季年史』では、金瀨鎮が墓を掘り返したのは先祖が「庶子だけに運を開かせる」ことに怒りを覚え、そのうっぷんを晴らすためであったと述べている。ともあれ、一族の墓に関することであるだけに、普通ならば無罪放免されたところであろうが、金瀨鎮には懲役3月執行猶予1年の判決が言い渡された。この判決が星圭に対する詐欺を計画した嫌疑のためであったことは確かである。墳墓発掘の容疑で逮捕された金瀨鎮に対し、刑法第189条により懲役3月執行猶予1年を言い渡すという内容の「大正9年刑令第76号」文書（謄本）まで、用意周到にも金星圭は文集に載せている。1929年に金瀨鎮が世を去り、彼の孫の寿東<sup>スドン</sup>の代に至ると、宗孫と庶孫の位置は完全に逆転したかのような様相を見せるようになった。金星圭が管理してきた聞慶郡加恩面<sup>カオン</sup>にある祖先の墓がある山の一部を、金寿東が詐欺師に騙されて失ってしまったときも、星圭は「すでに過ぎ去ったこと」であるとして不問に付してやるなど、年長者らしい懐の広さまで見せていた<sup>48</sup>。

一族で、とりわけ宗孫である金瀨鎮との衝突で、金星圭が完全に優勢になったのは1920年前後であったといえる。しかし、この時期は3・1運動直後、すなわち金星圭が渾身の力をふり絞って守ろうとしてきた封建的な諸々の価値が脅威にさらされ、揺るぎはじめた時期であった。また、早稲田大学英文科に進学した金祐鎮が、日に日に父に対する「叛逆」の気持ちを大きくさせていった時期でもあった。もともと、幼い時から儒学と実業

---

<sup>48</sup>「安東金氏県監府君派宗中員総会決議録第3号」『草亭先生文集』巻11（Ⅲ：279）



という2つの軸のなかで教育を受けてきた彼としては、儒教の観念や制度に対する思い入れもあった。熊本農業学校卒業後、実業について一言も残さなかったのは異なり、「儒教の綱倫」がつむぎだす「幾多の美しき相愛と義理の生活の世」<sup>49</sup>に対する未練は、家出をした頃までさまざまな場面で見られた。かつて10代初めに父が吟じた漢詩に答えて「父上の思いを果たすこと」や「忠孝」を強調していた姿は、幼少期のエピソードに属するたぐいのものであり、遊学時代に「夢を見るたびに年老いた父上にお目にかかります」と書いていたのも慣用句程度のものとして理解できる<sup>50</sup>。しかし、16歳のとき同い年の甥に送った手紙のなかでは「一家に対する世評を維持し、種族を保存することこそ後進のなすべきこと」であり、「ただ君だけが一家を支え、種族を保存する事業を行うことができるのだ」と激励しており<sup>51</sup>、また、未発表小説のなかでは、末期の悪弊から儒学自体の美学を救い出そうとするなど<sup>52</sup>、封建主義の批判者であるというよりはむしろ理解者に近い部分が金祐鎮にあったことは事実である。また、父に対する憐みの情も深かった。妾の息子という軛から生涯抜け出すことができず、「お前は庶子ではないか！」と罵り、悪態をつく宗孫から生涯逃れられなかった父を見るとき、金祐鎮は「極悪無道の瀨鎮(…)、あいつのあらゆる罪悪・不義・残忍・無道は、呪いになってあいつに還元されるだろう」といい、父に劣らず興奮した。ややもすると金祐鎮は「東洋専制」

<sup>49</sup>「芳蓮은 어찌하여 나병의 남편을 완쾌시켰는가」『金祐鎮全集』1, p.279. この文章はもともと日本語で書かれたものであるが、執筆時期は明らかにされていない。

<sup>50</sup>金祐鎮の漢詩全般については、정대성「한국 근대시의 면동: 김우진의 한시」(『민족문화논총』31집, 2005)を参照。

<sup>51</sup>「祐鎮叔主下書」(1912.07.23)『雲章要訣』。一家の行事で祐鎮の名前があるべきところに、起鎮という名前が繰り返し出てくること、「祐鎮叔主下書」としてまとめられているこの書翰の末尾にも「起鎮」という署名が出てくるところからすると、金祐鎮の初諱は起鎮であったと思われる。

<sup>52</sup>「芳蓮은 어찌하여 나병의 남편을 완쾌시켰는가」『金祐鎮全集』1, p.279.

の弊を克服し、その美德を甦らせるという共通の使命のなかで父と自身とをとらえていたのかもしれない<sup>53</sup>。

しかしその一方で、金祐鎮は「東方礼儀の国」という言葉のなかには、過去から現在に至るまでのあらゆる生活の害毒が染み込んでいるとも考えていた<sup>54</sup>。舞踊や音楽にさえ朝鮮伝来の「悲哀や単調さ、無気力さ」を感じ取り、辟易することもあった<sup>55</sup>。どうすることもできない分裂が彼の身体には染み込んでいた。「新羅聖族の後裔」であるという父の自負心には堪えられないのに、自身の日記帳の冒頭に檀君紀元、日本紀元と並んで箕子紀元・孔子誕生日・金闕智誕生日・大時公誕生日を1つ1つ記したこともある。このような姿に象徴的に表れているように<sup>56</sup>、彼は父が死力を尽くして積み上げた秩序を完全に無視することはできなかった。

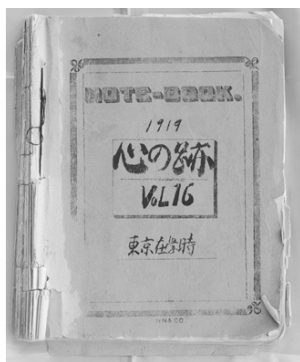


図3 金祐鎮の日記「心の跡」1919年度の表紙

“Vol.16”と書いてあるところからみると、他の巻もあったものと思われるが、これまで見つかっている原本はこの1冊だけである。1919年は3・1運動が起きた年である。

<sup>53</sup>「心の跡」『金祐鎮全集』2, p.440.

<sup>54</sup>「장작을 권함네다」『金祐鎮全集』2, p.68.

<sup>55</sup>1922.04.22 『金祐鎮全集』2, p.487.

<sup>56</sup>「心の跡」の書き出しに記されている。『金祐鎮全集』2, p.437.

「僕は昔の人の教えに耳を傾けないわけではない。だが、新たな道の玄関に足を踏み入れたこの個性と、この生への愛着はどうするべきなのか。」<sup>57</sup>近代高等教育を受けた同年代の多くの若者とは異なり、金祐鎮は「昔の人の教えに耳を」傾けなければならなかった。彼がもう少し従順であったり安易であったりしたならば、彼は父の権威に妥協していたであろう。それは父が築いてきたものを維持し補修すれば足る、穏やかな道でもあった。しかし金祐鎮は、誰しもが認める温和な性格でありながらも、叛逆の天性を棄てることはなかった。金祐鎮は考えに考えた。「あらゆる伝統の連続のなかで僕は生まれた。そして今も伝習的な偶像のなかに埋もれている。だが、光明の降り注ぐ新たな世界を僕は絶えず熱く求めている。この肉体の「幽霊」と周囲の灰色に衰えていく脅威に対し、彼らの運命の神に対して、嗚呼、僕はこのまま屈服しなければならないのか。屈服せざるを得ないのか。」<sup>58</sup>

金祐鎮の座標は、李光洙・崔南善・廉想涉・金東仁のそれとは異なっている。封建と近代という2つの生を生涯一身に生かし続けていた洪命熹や玄相允なども異なっている。金祐鎮は、抱石・趙明熙や海星・洪在遠と非常に親しい間柄であったが、没落両班の後孫である彼らとその道が一緒であるはずもなかった。「万歳前」(1922)において廉想涉が描き出したのが3・1運動以前の典型的な状況であるとすれば<sup>59</sup>、「泣きながら迎え入れてくれる」母、「宗家の長男として生まれたために、生涯指一本動かすことのなかった」従兄、そして「取り澄ましてキセルをふかして座っ

<sup>57</sup> 1921.11.26 『金祐鎮全集』 2, p.483.

<sup>58</sup> 1921.11.26 『金祐鎮全集』 2, p.483.

<sup>59</sup> 「万歳前」には、3・1運動以後の現実を批判する内容も含まれており、検閲を避けるため、廉想涉は3・1運動以後の現実をそれ以前の現実と重ねあわせて形象化したという指摘もある(이해명 「正史」와 「情史」 사이 : 3・1운동, 후일담의 시작」 박헌호, 류준필 엮음, 前掲書)。傾聴すべき指摘であるが、本稿では詳しい議論を省略する。

ていた」父は、直後に起きた3・1運動とともに去らなければならないタイプの人間であった<sup>60</sup>。また、病に伏す妻や、浮浪者同然の金義官は、この「万歳前」の群像、つまり「屍しかばねの臭いを漂わせたり、「囲碁や将棋で日々を送り、夕方になれば酒飲みに出かけ」たりする（万歳前：89）、腐敗や墮落といった様子を端的に示している。普通学校の教師である兄だけがただ1人時流に適応し、財産を入れ、総督府令と旧慣との間で折り合いをつけようとするが、彼もまた「墓のなか」の人物であるばかりであった（同上：62）。このようにすべてが「墓のなか」である状況のなかで、1人「墓のそと」の「新生」を予感したのが「万歳前」の主人公（同上：105～107）であった。しかし、このような主人公とは異なり、金祐鎮にとって父の世界は厳然たる事実であり、彼の前に父は無能力であるどころか往年の「精力・才能・天才・洞察力」を余すことなく備えた成功者として君臨していた<sup>61</sup>。3・1運動による急激な変動がなかったならば、金祐鎮の「叛逆」は始動すらできなかったであろう。孔子崇拜の打破は「自我を保護するための正当防衛」であり、時代が要求する緊急の事務」であり、家族制の打破は「大和楽を取り戻すための根源であり、大発展を求める所為」であると言い切れるような挑戦の姿勢<sup>62</sup>を、年若い金祐鎮は父に対してとることができなかったためである。

## 5. 3・1運動の黎明、交替期の息子

父とは異なり、3・1運動のニュースに金祐鎮は歓呼した。ニュースを伝え聞き、日記に「革命！革命！新たな生命の革命！」と記したのが、彼の

<sup>60</sup> 廉想渉「万歳前」『廉想渉全集』1、民音社、1987、pp.85～86。

<sup>61</sup> 「難破」『金祐鎮全集』1、p.79。

<sup>62</sup> 宋鎮禹「思想改革論」『学之光』5号、1915.05、pp.3～5。

3・1運動に対する最初の反応であった。第一次世界大戦を経て、大正デモクラシーの影響を受けた朝鮮青年にとって「革命」は、近未来の現実であった。素月・崔承九は「汝を革命せよ」(『学之光』5号、1915年5月)を書き、文学徒を自称する白一生という筆名の論客は「文学の革命児よ」(『学之光』14号、1917年11月)というタイトルの文章を書いた。2・8独立宣言や3・1運動が起こる前から、「我等の目的は(…)唯だ政治的革命である」というたぐいの宣言は、平凡な朝鮮人留学生の間でも一般化していたと思われる。例えば、3・1運動のさなかに逮捕された明治大生梁周治は、高宗 薨去のニュースに接するとすぐに民衆革命を予感した。「現今京城ニハ李太王崩御ノ為人民集合シテ革命スルニ好イ機会デアルノニ、アー如何ニスヘキヤ」<sup>63</sup>と書き残している。この若者の目には国喪のために集まってきた群衆さえ、会集して革命をしようとする大衆として映っていた。しかし、朝鮮に戻るか、中国に亡命するかで悩む一方、アメリカに渡ろうと考えて偽造身分証を作ろうとするなど、言動が定まらないところからも分かるように、彼が言う「革命」の内容は具体的でなかった。「革命」は政治・文学・精神・民族・労働者・女性・子供などあらゆる問題を含んでいたが、権力闘争の問題としてはほとんど考察されなかった。もちろん、「革命」に際し国際的、階級的連帯が模索されなかったわけではない。例えば、1915年にはアジア各国の留学生が新亜同盟党を組織しており、また1917年にはロシアで韓人社会党が結成されている<sup>64</sup>。しかし、多くの人々は現実政治としての「革命」に無関心であり、無知であった。帰国したら京城に行き、民心を扇動すると意気込んでいた留学生であっても、帰郷の道ではぐずぐずし、帰郷後も何だかんだで腰を上げられず、結局は電信柱に太極旗を巻きつけたり、

<sup>63</sup>「梁周治尋問調査」付録(1919.01.25日記)大韓民国文教部国史編纂委員会『韓民族独立運動史資料集』13, 1990, p.518.

<sup>64</sup>『運転金鏝洙』韓国精神文化研究院現代史研究所, 1999, p.196, p.306.

ひと気のまばらな通りで2回ほど万歳を叫んだりする程度の、散発的な行動で終わってしまうことも多かった<sup>65</sup>。理想は非常に高いが、現実経験は乏しかったのである。そのような意味で3・1運動は幼少年期に韓国併合を迎えた彼らの人生観を180度転換させた最初の集団的現実であった。

金祐鎮もまた彼らと大きく異なるところはなかった。金祐鎮は3・1運動当時、朝鮮半島での蜂起や虐殺よりも、東京で2・8独立宣言を主導した知り合いの留学生の行方に大きな関心を寄せ、蜂起の具体的な結果よりも、蜂起の精神的影響力に興味を抱いていた。金祐鎮は1919年1月、高宗が薨去したというニュースに接すると、哀悼の意を表しながらも「これからは、新生命・新元氣・新意味を発生させることが、我々の当然の任務である」と日記に記した<sup>66</sup>。「事実上最後の君主」であった高宗の死は、旧時代の終焉を時宜適切に象徴している。金祐鎮はまさにこの日を境に、それまで長い間日本語で書き続けてきた日記をハングルで書きはじめた<sup>67</sup>。「革命」が、個人の新生、民族の独立、世界の改造を同時に約束する「革命」が、近づいてきていたのであった。積極的に参加していたわけではなかったが、2・8独立宣言後、投獄された人物に面会をしに行ったり、裁判を傍聴したり、学友会の会合や黎明会の講演会に参加したりするなど、金祐鎮は3・1運動期間を通じて「新生命・新元氣・新意味」を発動させようとする者にふさわしい行動をした。しかし、このような行動は長くは続かなかった。実際に3・1運動が沈静化するよりも前に、金祐鎮にとっての3・1運動は憂鬱な結末を迎えていた。2・8独立宣言関係者に実刑が言い渡されると、「疲憊と鬱憂」のため日記を書くこともできないと打ち明けるようになるなど、

<sup>65</sup>「梁周洽尋問調書」付録（1919.03.24～03.25 日記）大韓民国文教部国史編纂委員会，前掲書，pp.524～525.

<sup>66</sup>1919.01.28, 『金祐鎮全集』2, p.442.

<sup>67</sup>日記の言語選択の様相については、윤진현「김우진의 문자의식과 문학어의 성립과정」(한국국예학회 회 刊, 前掲書, 2010)を参照。

彼はしだいに蜂起の現実から目を背けるようになっていき、4月半ばになると「不満足、憎悪の現実を逃避して、僕が行くべきはこの幻覚の世界のみ」と心苦しい思いをつづるようになった<sup>68</sup>。経世的で実務的な父とは異なり、内向的で思索的な金祐鎮には「幻覚」の道の方が、はるかに近くにあったのであろう。しかし、実際の3・1運動は、金祐鎮のように「幻覚」の道に進む方向で終わりを告げたわけではなかった。性・地域・理念の違いを超えて、3・1運動の火種に、つまり3・1運動として始まった地殻変動に、どのように立ち向かっていくかは、まだ提起されたばかりの問題にすぎなかった。

金祐鎮は一貫して政治革命に先立ち自我や精神の革命を強調する立場に立っていた。「アイルランドの文芸復興の詩人が政治的自由よりも靈魂の自由を求めていること」<sup>69</sup>に耳を傾けなければならないであるとか、「改革だとか、進歩だとか、實際的だとか、賢いだとかいうことよりも、無秩序で力強い革命が必要」<sup>70</sup>であるとかと述べている文章からは、金祐鎮が文学を選んだ理由も読み取ることができる。彼にとって文学とは自我の変革からはじまり、世界の新生に向かうべきものであった。日本から朝鮮に戻ってきた後のことであるが、ともに木浦で活動した五月会 (Société Mai) の同人に向かって金祐鎮は「いわゆる「文学青年」の生活を捨てよ」と忠告したことがある。流行に浮かれ世評を追う生き方は、創造という目的のためには敵であるだけであり、「道端の馬の鳴き声、1本のさびしい草の芽、ただ1人のけだるい咳音を聞くときも、自身の生命を尽くして洞察する」必死な姿勢が必要だというわけであった。「我々にはこの自由しかないのです(…) 新たな生命を産もうとする母親の姿のように、全宇宙を一点に集

---

<sup>68</sup> 1919.04.20 『金祐鎮全集』2, p.468.

<sup>69</sup> 「소위 근대극에 대하여」 『金祐鎮全集』2, p.32.

<sup>70</sup> 「창작을 권함네다」 『金祐鎮全集』2, p.65.

中させるのです（…）この革命のほかには何か効果があるのか、考えてごらん下さい」（全集2：65）。もちろん、金祐鎮が政治革命に反対していたわけではない。さまざまな研究で指摘されているように、金祐鎮は階級路線を支持し、階級文学の意義を認めていた。ただ、それが「生命」の衝動から発現した革新ではなく、時流に便乗した扇動になることについては、とりわけ警戒していた。各個体が有している生命力を最大限に発現させることこそ新世界の基本倫理にならなければならないという金祐鎮の主張は、新世界は決してなじみのある世界ではなく、見たこともない世界であろうという予測に至る。そこは「母を姦す者が出てくるほどに、父を殺める者が出てくるほどに、そしてその行動の倫理的価値が生じなければならないほどに」（全集2：68）今とは大きく異なる世界であるかもしれない。未だ構築されていない未来は、それほどまでに予測不可能な世界である。換言すれば、彼が考える新世界とは既往の設計図ではなく、各自の根本的な自由意志によって現実化されていかなければならない世界なのであった。このような意味で金祐鎮は舶来品を模倣した「蒼白な文学」に反対し、階級的、倫理的、性的、形而上学的なテーマに挑む新たな文学を模索していたのである（全集2：68～69）。

1923年陰暦正月13日、早稲田大学英文科3年に在学中であった金祐鎮に電報が届いた。それは父の危篤を告げる知らせであった。金祐鎮は弟たちを連れて、急いで朝鮮に向かい、3日後、故郷にたどり着いた。金祐



図4 早稲田大学英文学科在学中の  
金祐鎮



鎮らが到着する前の日から金星圭は昏睡状態に陥っており、医師も臨終の準備をしておくように言い残して帰ってしまっていた。家族は葬式の準備に大わらわであった。当時、27歳であった金祐鎮は死を前にした父を新たな目で眺めていた<sup>71</sup>。「半白の髭と皺、目がくらむような褐色の広い額、ぼこんとくぼんだ2つの目、desolateにつぐんだ彫刻のような口」<sup>72</sup>。そして、あえて観察者の視点にこだわりながら金祐鎮は「臨終を迎える老人以外の何者でもない」父、「ついに静止が彼を占領したかのよう」に静かになっていく父を発見する。あれほど精力的で頑強であった金星圭は、発熱と悪寒のため1滴の水さえ喉を通らず、数日間、ただわずかにあえぐばかりであった。息子はひそかに期待を抱いていたのであろうか。「死に臨み、この老人は僕でもなく他人でもない」（全集2：498）、「父は（…）死それ自体であるかのように静かになっていった」（同上：498～499）と書き記したときの金祐鎮の語調は、ひっそりとしていながらも余裕に満ちていた。一晩明けると彼は、生と死との間の根本的な対立を推し測って考えるようになるほど哲学的な思惟に没頭していた。「何のために心を疲れさせ／体を疲労させ、魂までも腐らせ／光を求めるのだろうか」死の温かな懷に帰依すればむしろ幸せだというのに。いや、それでも生は意味あるものだ。「樂園は、生の樂園は／平和と気楽さの後にはおらず／混沌とした闘争の後」にあると考えるまでになっていた（同上：499）。

しかし、金祐鎮が実家に戻ってきてから3日目にあたる日、金星圭は峠を越えた。「浅海の投薬が効いたようだ」（同上：499）。満60歳にさしかかっていた金星圭は執念で回生に成功したのである。金星圭は未だ果たせてい

---

<sup>71</sup> ここで引用する日記は、1923年5月19日から22日までのものである。「草心亭日記」に見られる正月という記録とは一致しない。回復していた金星圭が、再度峠を越えた可能性、金祐鎮が後に記憶をたどりながら日記を書いた可能性などが考えられるが、状況が確実ではない。

<sup>72</sup> 1923.05.19『金祐鎮全集』2, p.498.

ない2つのことのために、目をつむることができなかつたと述べた。1つは父金炳<sup>キムビョンウク</sup>豆の墓を移すことであり、もう1つは先の3代の文集を刊行することであった。この2つの業は翌日から実行に移された。曾祖父の金継<sup>キムゲスン</sup>淳の文集と祖父の金禎<sup>キムソクン</sup>根の文集とを合わせて『安東金氏二世逸稿』を刊行し、父金炳豆の文集は『磊栖集』というタイトルで別個に刊行した。金祐鎮は『磊栖集』に跋文をつけ題字を書き、父の生涯を記した「草心亭実記」を作成した<sup>73</sup>。また、死が近づいていることを実感した金星圭は、祥星合名会社の設立にも着手した。このことは「癸亥（1923）の復活以後」神経衰弱にかかり業務が順調に処理できないため、会社を設立して資産を寄託することを意味していた<sup>74</sup>。1924年、早稲田大学を卒業した後、金祐鎮は木浦に戻り、祥星合名会社社長に就任した。彼の社長就任は、父のいわゆる「癸亥の復活」に、何らかの影響を受けたためだったのであろうか。それとも老いた父に対する憐みのためだったのであろうか。それとも象徴の世界は象徴の世界として、現実の世界は現実の世界として、別個に処理することができるだろうと信じていたためだったのであろうか<sup>75</sup>。人々の間の自然な「親和力」や共同体の秩序を思い浮かべ、「ここから」「喧しい都市の雑沓（…）市街の群衆（…）そこからすぐに救済されなければ」ならないと自らを説得しながら（全集2：426～428）、金祐鎮は帰郷した。

成年を迎え、約10年間の留学生活のなかで、金祐鎮はある程度父からの距離ともいうべき、冷静さを模索していた。3・1運動後になるとその傾向はさらに強まった。1922年12月3日付の日記には、父の手紙を繰り返し読んだ後で、「嗚呼可憐なる人生／旧伝統の遺物の新生に対する恐怖こそ不

<sup>73</sup> 金漢穆「安東金氏二世逸稿序」『安東金氏二世逸稿』／鄭鳳鉉「怕知窩集序」／權應僖、金昌鎮「怕知窩集跋」

<sup>74</sup> 「祥星会社座上啓」『草亭先生文集』巻6（Ⅱ：190）

<sup>75</sup> 「象徴」に対する信頼と懐疑の履歴は「出家」（『金祐鎮全集』2，pp.427～428）に詳しい。これについては6章で述べる。

常なり。皮肉の生よ。」と自らを嘆く一節が出てくる(同上:496)。ここで挙げられている金星圭の手紙は残っていないが、日記でいう「新生に対する恐怖」というのが3・1運動後の所産であることは間違いない。金星圭は3・1運動直後に京城日報と毎日申報とが合同で行ったアンケートに「騷擾答案」として答えを寄せたが、このときはまだ儒学的な旧倫理の復活こそ社会の諸問題の解法であると信じていた。しかし、今や金星圭は、数年のうちにすっかり変わってしまった状況に向き合わなければならない身となっていた。また、金祐鎮の語調も完全に変わった。彼が見るに、父は今や「かわいそうではある一個人的な運命と戦い、勝利を収めたが、時運の不利により「新」の脅威を受けている」<sup>76</sup>存在であった。非常な精力と天賦の才能とにより、生涯をかけた戦いでは勝利を収めたが、今やその勝利自体、何の意味もない時代になっていた。金祐鎮が父を「悲劇の hero」「悲劇的運命の主人公」と呼ぶようになったのも、この頃からである<sup>77</sup>。依然として父は威力的な存在であったが、その一方で悲劇的な存在でもあった。金星圭は、金祐鎮が強く意識していた「関節がはずれた世の中」(全集1:79)、すなわち“The time is out of joint!”<sup>78</sup>のスケープゴートであったわけである<sup>79</sup>。かつて父の理念に同調していたこともあった金祐鎮は「この伝統に抵抗すべきその力と武器とを僕が持っていない」わけではないと記した。ただ、すでに悲劇的な存在になってしまった父に向かって「父子間の愛情や、一種のセンチメントの軛から抜け出す」<sup>80</sup>意志を發揮できるかどうかという問題が残っているにすぎなかった。「嗚呼、父よ(…)貴方をして悲劇の主

<sup>76</sup> 1922.12.03 『金祐鎮全集』2, p.496.

<sup>77</sup> 1922.12.04 『金祐鎮全集』2, pp.496~497.

<sup>78</sup> 1922.12.03 『金祐鎮全集』2, p.496.

<sup>79</sup> もともとは『ハムレット』に出てくる一節である。この一節についての詳しい解釈は、유민영 「선각자 김우진의 연극실험」(한국극예술학회 편 『한국현대극작가론1: 김우진』 태학사, 1996, p.61)を参照。

<sup>80</sup> 1922.12.04 『金祐鎮全集』2, p.497.

人公から抜け出せしめるには、僕の個性と自我とを燃やしてしまわなければなりません。』<sup>81</sup>無視さえしていれば父を殺すには十分であることを彼はよく理解していたが、その一方で彼は父を無視することにためらいも覚えていた。自身の父の墓を移し、三世文集を刊行し、祥星合名会社を組織することで、死後の準備を完成させようとしている父を、息子までが見放してしまったならば、父の生涯は無意味なものになってしまうであろう、彼はこのように考えていた。

このように考えると、金祐鎮が祥星合名会社の社長に就任したのは、もう少しだけ、余命幾ばくもない父を支えようという思いからだったのかも知れない。しかし、1924年6月の帰郷後、社長に就任した彼は、自身がこの世界の人間ではないことを改めて痛感した。約10年ぶりに戻った故郷の家は、想像以上に毒々しい「混乱と無秩序」とに侵されていた。「家父、つまり主人のすさまじく、驚くべき集中力」のおかげで崩壊を免れていただけであり、家の柱や垂木からは腐敗臭が漂っていた。とりわけ構成員の多数を占めている「女性たちののろのろとした生活」は無惨であった。金祐鎮は、甥とともに遊んでいる甥の娘からも、家父長の威圧的な支配が刻み込まれた姿を見出す。昔の服色どおりに服を着せようとする金星圭に対抗して、彼女は髪を切り洋装をしていた。金星圭にとって、息子の早稲田大学英文科進学が、自身に向けられた初めての反抗であったとすれば、「辰吉が衣装の問題を自分の思い通りに」(全集2:422)したのは2度目の反抗であった。そのような辰吉が立小便をするしぐさをする姿を見て、金祐鎮は彼女の頬を叩き、車座に座り手を叩きながら笑いこける女性たちを激しく呪った。「辰吉よ！女よりも男を好むことはありえよう(…)しかし(…)男たちの侮辱・優越・生意気さがこの家の空気を支配していること

---

<sup>81</sup> 1922.12.04 『金祐鎮全集』 2, p.497.

が、僕には恨めしい。」<sup>82</sup>明らかに過剰な反応であった。金祐鎮自身も、自身が過敏になっていることに気付いていた。家に戻ってきてから数か月のうちに「反抗の毒気」は收拾がつかないほど大きくなっていった。父が率いる「家族主義の勇敢な行進」、金祐鎮はその隊列のなかでひそかに「叛逆者」としての自分自身を想像するようになっていた<sup>83</sup>。

雪風が吹き荒れるなかを、位牌を載せた輿に先立って歩いていく父の姿を見て、金祐鎮は自身の家が置かれている象徴的な座標を読み取る。「混沌と薄明の雪夜のなかを歩く我々は一僕には時代の暴風雨と迫害のなかで歩くことのように思えた。」<sup>84</sup>・1運動以後本格化した「時代の暴風雨と迫害」のなかで、一角の若者は思う存分爽やかな風を感じていたが、金祐鎮はむしろ「苦悶」や「焦燥」を強調していた。「黎明に立っている若者(…)、灰色と薄赤の光のなかに立っている朝鮮の若者。彼らはこの苦悶において Russia 革命前の *intelligenza* より幾倍、この焦燥感において Dante 以上。僕は彼らの今の運命を喜んでい。なぜなら過去の世界において彼らの生活は不幸でも幸福でもなかったから。」<sup>85</sup>金祐鎮は苦悶、焦燥、不幸のなかに立ちながらも、時代の黎明に先陣を切って向かい合うことを望んでいた。祥星合名会社社長在任中、文学同人集団「五月会」を立ち上げ、京城内外の雑誌に数度にわたって文章を発表するなど、組織的な活動はしなかったものの、文壇への触覚を鈍らせることはなかった。それでも彼が文学に対して覚える渴きは徐々にひどくなっていった。時遅れて金祐鎮の近況に接した趙明熙が「ひどくのがめ、嘲る言辞で」手紙を書き送ったとき、金祐鎮は「初めて友達1人をこの世で発見した」ような気がして、読みながら

---

<sup>82</sup> 1924.11.29 『金祐鎮全集』2, p.511.

<sup>83</sup> 1924.11.29 『金祐鎮全集』2, p.511.

<sup>84</sup> 1924.11.29 『金祐鎮全集』2, p.511.

<sup>85</sup> 1922.11.20 『金祐鎮全集』2, p.494.

涙を流したと返事を送った<sup>86</sup>。金祐鎮が一切の財産を捨てて縁を切り、父の訃報を受けても実家には戻らないことを心に決め、家出を決行したのは1926年のことであった。この年の夏、東京に滞在しながら金祐鎮は会心作「山豚」を完成させて原稿を送った。また、9月にはドイツに発つことを計画していた。

## 6. 対決の内面化、「自由意志」の無意識あるいは少数性

「一家の精神面に至るまで絶対的な影響を及ぼし」、3人の息子にはさらに大きな影響を及ぼしていた金星圭であった<sup>87</sup>。そのため、彼に対する下からの「叛逆」を実行するためには、渾身の力が必要であった。各自、独自の才能や性格を有していた金祐鎮兄弟が、叛逆と総合という軌跡を描いていった過程はそれ自体興味深い。父に最も似ていたと思われる次男の哲鎮<sup>88</sup>は、青年会－共産党－新幹会活動を経て投獄された後、府協議会員を歴任した<sup>89</sup>。また、祐鎮と親しく、中国留学中は毛沢東軍に身を投じていた

<sup>86</sup> 趙明熙「召수산군을 懷想」『抱石趙明熙全集』東亜日報出版局，1995，p.344.

<sup>87</sup> 김방한, 前掲書, p.20.

<sup>88</sup> 兄弟間の 'intimate jealousy' の場面 (1919.03.31『金祐鎮全集』2, p.467) は、もう一つのテーマである。金祐鎮は「難破」のなかで「同腹弟」を「腹黒く、目ざとく、人の機嫌をよくとる」異質な性格の持ち主として描き出している (79)。また、熊本農業学校時代、祐鎮・哲鎮兄弟をとともにもてなしていた同級生も、祐鎮が虚弱体質で内向的であったのに対し、哲鎮は「体が強く、明朗な性格」であり、映画館にもしょっちゅう足を運び、弁士の真似がうまかったなど、快活な学生時代を送っていたと証言している。成沢勝「金祐鎮의 熊本時節」『金祐鎮全集』2, 전예원, 1983, p.307.

<sup>89</sup> 金哲鎮は、金祐鎮が世を去った翌年から本格的に社会運動に身を投じるようになり、全南青年連盟や木浦青年同盟では執行委員長を務め、新幹会木浦支会総務幹事としても活動した。朝鮮共産党や高麗共産青年会にも加わったが、日本の警察に検挙され、1929年には懲役2年執行猶予5年の有罪判決を受けた。その後、転向するかのような歩みを見せながら、地域のさまざまな企業の重役を務めた。解放後は『木浦日報』を引き継ぎ、木浦商科大学の学長を歴任した。1971年に死亡した。강만길, 성대경 역음『한국 사회주의운동 인물사 전』창작과 비평사, 1996. 金祐鎮も青年会活動に関係していたのではないかという見解も見られるが (윤진현, 前掲書)、確証はない。

三男の翼鎮は、帰国後カトリック指導者として生まれ変わった<sup>90</sup>。哲鎮と翼鎮とが選んだ道を、それぞれ「政治」と「宗教」とあえて命名するならば、金祐鎮は「個性」や「生命」という観念を通じて文学に至る道を歩んだ。金祐鎮が選んだ道は、1910年代後半から1920年代初めにかけて、多くの知識人によって共有されており、近くは大正期の日本、遠くはニーチェ・ベルクソン・ロマン・ロランなどのヨーロッパに由来するものである<sup>91</sup>。ただ、生涯父との緊張関係のなかで生きていた金祐鎮は、そうした思想の上に、自身だけの独自の個性を投影させていた。個体・生命・歴史・大衆・女性など、各種の話題に対する金祐鎮の視点は、慣習的な類型からはるかに抜け出していた。例えば、金祐鎮の「自由意志」という概念には、大正生命主義の影響や、それを通じて紹介されたニーチェの思想の影響が見られる。しかし、それらの思想を具体化し「意志」の無意識性や遍在性を強調する点は金祐鎮独自の主張である。金祐鎮は大きいものと小さいものとを対比させ、自身を後者の側に置いた。「僕は取るに足りない、衰えゆく路傍の1本の草であることをよく知っている。」<sup>92</sup>しかし「力とは蒸気機関車の発進、それではない。自然の1個の小さな昆虫も楽々と臓腑を響かせる。これもまた力なのだ。」<sup>93</sup>1匹の小さな昆虫に自分自身を重ね合わせながら、金祐鎮は大きく強くずばぬけた存在だけが権利を持つのではないことを改めて繰り返した。「数十丈にもなる滝は自らの力に溢れるように跳ね落ちる。それと同時に小さな小川の水も自分ではどうすることもできない力に押されながら流れているのではないか。」<sup>94</sup>

---

<sup>90</sup>「勉強は北京でなすり、共産主義者におなりになった後、回心して仏教を研究するのに入山までなすり、ついにカトリックに帰程された」という回顧は参考に値する。구상「김익진 선생의 추모」김익진『민속과 서학』성 바오로 출판사, 1971, p.326.

<sup>91</sup>윤진현, 前掲書, pp.111~130.

<sup>92</sup>「出家」『金祐鎮全集』2, p.430.

<sup>93</sup>1922.12.04『金祐鎮全集』2, p.496.

<sup>94</sup>「A Protesto」『金祐鎮全集』2, p.423.

「菅葛の才藻と拿破崙の力」(全集1:79)とを持った父との対決が、金祐鎮を小さく弱く劣等なものに対する共感へと導いていったのではないかという主張は傾聴に値する。金祐鎮は、これらのつまらない存在を逆転させる契機、つまり意識的意志とは関係なく、生命本来の衝動が噴き出す瞬間に注目していた。彼のいう自由意志とは、個体の自主的ではあるもののはっきりとした意志であるというよりは、むしろその逆に近いものであった。そのため、自殺するという決心は自由意志ではなく、自殺を決意し水に飛び込んだ者が最後の呼吸をするために足をばたつかせる無意識こそ、自由意志なのであるとした。また、金祐鎮はこの比喻を性や階級にまで拡大していた。「李<sup>イヨンニョ</sup>永女」のなかで、李永女は生活苦のため売春に出された女性であるが、「性のリズム」(同上:64)を大事にしており、また、「山豚」のなかで主人公の元<sup>ウオニョン</sup>英は「貞女ではない女性に愛を捧げる男」と自称する一方で(同上:123)、かつての愛人<sup>ジョンスク</sup>貞淑に「イノシシのようなずっしりとした力」を徹底して培っていくことをすすめているが(同上:169)、女性の主体に対してもっぱら生命と個性の倫理だけを課すのは、当時としては珍しい場面である<sup>95</sup>。また、彼は労働階級についても同様の認識を示していた。理念的知識人と比べて現場の労働者の運動が持続的であり徹底しているのは、知識人の行動が「第二義的な、不自意的な」ものであるのとは異なり、労働者は「絶対的な自由意志」から出発するためであった<sup>96</sup>。知識人が間もなく消え去るであろう「危険で妥協的な」存在にすぎないのに対し、労働者は「春に芝生が生えてくるように、地平線上に」育っている存在であった(全集2:404)。また、これらのあらゆる運動の根本動力であ

<sup>95</sup> 同様の論点に関する詳細な議論は、윤진현, 前掲書, pp.230~254を参照。彼は「自身の溢れる生命力に忠実な人間」が、金祐鎮の理想とする人間であったと論じる一方で、「もぐら詩人の幻滅(두테기 시인의 환멸)」の一部を挙げながら分裂の兆候についても指摘している。

<sup>96</sup> 金祐鎮「自由意志의 問題」『金祐鎮全集』2, p.404.



る自由意志は「極めて小さなアメーバ」にすぎないものであった（同上：403）。金祐鎮は、ハーゼンクレーファー（W. Hansenclever）の「息子」の一部を引用しながら、最後の作品となった「家出」を歌うように締めくくった。「父さん、貴方は私を見くびっているでしょう。それが貴方の権利ですから。私は父さんの財産だけで生きてきたのですから。しかし、私はこの心臓のなかの竜巻によって初めて息子という籬を飛び越えたのです。えっ、そうしてはならないですと。そもそもどういう法があるために、貴方は私をその束縛のなかに押し込めようとするのですか。」（同上：431～432）

金祐鎮は父との対決のなかで思想の基本形を完成させたものと思われる。現実と文学とを別個のものとする「二元的」「第二義的の哲理」である「象徴」を捨て、「本物の生活」「本物の生命」である「力」を選んだのが、最後の過程であった（同上：427～428）。しかし、父に対する愛と憎しみは最後まで金祐鎮を煩わせ続けた。「今、僕が父に与える苦痛や幻滅を考えると、この胸は張り裂けそうである。僕にとってはこれだけが未だ解決されていないのだ」（同上：422）。また彼は、父は自分の内面世界を深く理解できず、自分を「個人主義」や「文学の中毒」と名付けて攻撃してくるであろうという思いを消すことができなかったが、このことも彼を苦しめた（同上：421、423）。もっとも、父の理解を求め「2つの世界の共存」を期すこともできただろうにという未練も消えなかった（同上：423）。しかし、彼は最終的に「理解だけが全てではない（…）理解する可能性よりも、因習へのこだわりの方が強いのだ」（同上：423）という判断を下し、父の世界との絶縁を宣言した。李光洙のような孤児意識や父親否定とは異なるし、かといって洪命憲のような尊重とも異なるような、「超克」の道が完成するかのように思われた<sup>97</sup>。筆者のしがたい想像ではあるが、金祐鎮がもう

---

<sup>97</sup> 金星圭と金祐鎮との間の世代葛藤を「否定」ではなく「超克」としてとらえようとする見解については、양승우, 前掲論文を参照。

少し生きていたならば、韓国近代文学は、そして韓国近代知識や精神の歴史は、また1つの特異な個性を獲得していたであろう。はばかりのない「否定」ではなく苦心惨憺たる「超克」の道が、参照すべき細路として長く記憶されていたかもしれない。しかし、父との対決のなかですっかり気力が尽き果てていた金祐鎮はもはや耐え切ることができなかった。6月に遺書に近い文章を数本認<sup>したた</sup>めていたかと思えば、翌7月には演劇運動に対する抱負を認めるなど、不安定な気配を見せていた「詩人」は、1926年8月、生涯最後の知らせを伝えた。日本を離れ朝鮮に向かう途中、玄界灘の上で失踪したという電文であった。

金祐鎮が世を去ってから約5年後、金星圭はついに息子の葬儀を執り行った。金星圭は「亡兄祐鎮墓表」のなかで息子の死因を「神経衰弱」と記した。それは「癸亥の復活」以後、自分自身に対して下していた病名でもあった。家出の後、住所さえ分からない息子に手紙を送り、安宿に泊まったり、安物を口にしたりすることは控え、遠出をするときは3等に乗ってはならず、必要な費用はいつでも請求しなさいと訴えていた金星圭であった。「帰って来させようとすれば、いくらでも方法はあるが」、決してそのような方法は使わないと認めるほど、忍耐強かった父でもあった<sup>98</sup>。長男に対する期待や愛情が大きかっただけに、息子に先立たれた衝撃もまた大きかった。息子の死因を「神経衰弱」とすることで、自らと周囲とを納得させようとしていたとしても、まるで神経が衰弱したかのように錯綜していた息子の心境に自分の存在が絡まっていたという事実を知らなかったはずはない。それゆえ、自責と悔恨の念もまた深からざるを得なかった。このように息子を失った金星圭ではあったが、彼はその後約10年間を生きぬいた。「癸亥の復活」の際に誓った課題、すなわち父親の墓を移し、三世文集を刊行し、ひいては祭祀権を移して独自の草亭公派を創立するには短い歳月であっ

---

<sup>98</sup>「寄祐鎮書」『草亭先生文集』巻4（I：413～414）

た。とりわけ、祭祀権の移譲は彼にとって大きな課題であった。一度も公言したことはなかったが、父親の祭祀を行うことは金星圭にとって長年の夢であったと思われる。生母の墓を移した翌年の1898年、夢の中に父金炳昱が現れ、星圭の家を眺めた後「汝方精潔なるに吾永らく居することを欲す〔汝家精潔 吾欲永居〕と告げたという記録がある<sup>99</sup>。おそれ多く、口にはできない夢であった。生まれ住んだ土地を離れ、新たな場所を探し、富を築くことに成功し、一族を呼び寄せ、借金を肩代わりする代わりに祖先の墓のある山を獲得した。それだけでも庶生としては不敬であるほどの成功であった。

1923年、父の墓を長城に移したのに次いで、1935年、ついに金星圭は宗中員総会での決議というかたちで、祭祀権を移譲させた。甥の金灑鎮の孫である寿東が、息子の佑<sup>ウヒョン</sup>顥の代以降はその5代祖、すなわち星圭の父親である県監府君炳昱の祭祀権を草亭公派に譲渡すると約束したのである。

「従曾祖父主草亭公派諸位は県監府君の親子親孫にあたり、追慕の誠が極めて厚く、しかも財産に余裕」があるため、報恩廟に祭祀権を譲渡することは「儒教の本来のあり方」に合致するという名目であった<sup>100</sup>。この決定は5か月後に開かれた宗中総会でも再確認された。垂献と終献〔祭祀を行う際に上げる3回の盃のうち、2回目の盃と3回目の盃〕の権利は金灑鎮の直系に残されたが、朝鮮時代における嫡長子権の象徴であった祭祀権を庶出に移譲したことは、極めて大きな出来事であった。これにより金星圭は庶出としての悲しみに浸っていた個人の運命に対して完璧な勝利を収めた。もっとも、族譜上の整理は祭祀権が移譲される前からすでに行われていた。金星圭は事実上の一人息子として育ったため、族譜には早くから嫡子として記載さ

---

<sup>99</sup>「記夢」『草亭先生文集』巻11（Ⅲ：310）

<sup>100</sup>「安東金氏県監府君（諱炳昱）派臨時宗中員総会決議録第4号」『草亭先生文集』第11（Ⅱ：290～293）

れていたと思われるが、『安東金氏大同譜』を編集する過程で、それまで庶出に「庶」の字をつけて表示していたのをなくし、庶出の生母は「室」と呼称し、姓は「氏」で呼ぶという彼の提案が受け入れられた<sup>101</sup>。金星圭らしい解決の仕方であった。彼は封建的な儒教倫理の再構築に生涯を捧げながらも、家門や嫡庶によって差別が標準化されることは周到に回避した。息子たちのために「婚礼標準書」を作ったときも、結婚相手の容貌・身体・操行・誠孝・勤儉・血統・門閥などをすべて考慮しなければならないとしながらも、「もっとも、家庭と父母の人格とが特異である場合、門閥にはこだわらない」という例外規定を置いていた。

ここで金星圭が長男の嫁として雲藍・鄭鳳鉉の娘を、次男の嫁として経農・権重顕の娘を迎えたという事実を再度想起されたい。これは封建の美德を守りながらも、東洋専制の悪弊は正すという彼自身の理念に適合する二元的な選択であったためである。鄭鳳鉉は大科に応試したり、官途を歩んだりすることはなかったが、長城や玉果<sup>オソクワ</sup>一带に徳行や文章で名の知れた人物であった。早くから詩文に通じ、「5歳文章」と呼ばれ、5、6年間の精進の後、相次いで両親を失くした。このとき彼は朝廷から呼ばれたが上京せず、またさまざまな地方官の推薦も受けていたが、白官にとどまった<sup>102</sup>。1910年、義兵将楊演泳<sup>ヤンヨンヨン</sup>が逮捕された際ともに検挙されたが<sup>103</sup>、1913年には地方別に2名ずつ指定される経学院講師に任命され、1918年に亡くなった際には総督府から特別下賜金100円が下された。このように、鄭鳳鉉が正統儒学の理念を象徴しているとすれば、次男哲鎮の義父にあたる権重顕の面貌は全く異なっていた。乙巳五賊の1人に上げられる権重顕は安東権氏の庶子出身であり、日本語に通じていたため「倭党」と呼ばれていたが、

<sup>101</sup>「答大同譜副有司鼎鎮書」『草亭先生文集』巻4（Ⅰ：405）

<sup>102</sup>「家状」『雲藍先生統集』巻2（Ⅱ：513～515）

<sup>103</sup>「文倡録着名者 楊演泳<sup>에</sup> 關<sup>한</sup> 件 2月3日 榮山浦分隊長<sup>의</sup> 内報」（韓国国史編纂委員会韓国史データベース提供）

王室の信任を得るのに成功し、協辦を経て大臣の座にまで上り詰めた人物である<sup>104</sup>。1900年代、一時漢城に測量学校を開いたという記録も見られる。家門—儒学教養—科举及第という伝統的な方法を通じて身を立てるのではなく、語学や測量学を学ぶことで進路を切り開いた、新進の専門技術官僚層に該当する人物といえよう。金星圭は相舅2人としばしば書信のやりとりをしていたが、鄭鳳鉉との手紙が家内の安否を問う水準にとどまっていたのに対し、権重顕との手紙では方位や暦法など幅広い話題を扱っていた<sup>105</sup>。

1901年、当時漢城外国語学校徳語科〔ドイツ語科〕の学生であった申興雨<sup>シンフンウ</sup>が引き起こした波紋がよく示しているように、この時期新進の専門技術知識人の挑戦は重要な社会的論題になっていた。1894年に科举制が廃止されるまでは、家門—儒学教養—科举及第という伝統的な出世コースが莫大な影響力を及ぼしていたが、科举制の廃止を前後する頃になると、残班〔一族の勢力が傾き生活が苦しい両班〕や両班家門の庶子を中心とした近代学問修学者が大々的に躍進するようになった。金星圭自身や相舅の権重顕もこのような1人であったが、金星圭の生涯の友人の1人であった南宮櫛<sup>ナムグンオク</sup>も没落両班の出身であり、外国語の実力をもとに出世した人物であった。南宮櫛は英語学校である同文学を卒業した後、御殿通訳などの経歴を積み、独立協会や皇城新聞社などで活躍し、1905年から1910年まではさまざまな地方官職を歴任した。金星圭とは趙臣熙の随員として香港に滞在していたときからの付き合いであった<sup>106</sup>。彼ら「周辺部の両班」出身者は、ずばぬけた実務能力と卓越した現実適応力とによって、転換期の現実に適応し、教育

<sup>104</sup> 서영희 「권중현・이지용, 개화론자・한일동맹론자의 변신과 행로」 『내일을 여는 역사』 19호, 2005参照。

<sup>105</sup> 「答経農權重顕書」 『草亭先生文集』 卷4（1：380）

<sup>106</sup> 1930年代の十字架党事件当時、南宮櫛は金星圭を3人の親友の1人に数えていた。国史編纂委員会 『韓民族独立運動史資料集』 48, 2001, p.454.

や実業精神で武装し、一時代を生きぬいた。長男金祐鎮を自殺によって失った数か月後、大きなダメージを受けていたにもかかわらず、金星圭らが酒の席で残した自作詩は「年は喰ったがくたばりはしない」であるとか、「今日のわが教育産業／わずかでもどうして等閑」できようかといった、依然として覇気に満ちたものであった。植民地期を経るなかで、彼らの歩みは宗教、理念、路線などにおいて大きく異なっていた。しかし、南宮憶の娘が尹致昊<sup>ユンチホ</sup>の息子と結婚し、権重頭<sup>クンウソン</sup>の別の娘が尹友善<sup>ユンウソン</sup>の息子と結婚するなど、彼らの間には親密な関係や婚班のネットワークが築かれていた。これについては今後追跡すべきテーマであろう。また、金星圭が初代会長を務めた木浦の儒山詩社をはじめとする漢文学団体に庶出や中人が多数集まっていたという点も同様の脈絡で注目される。

近代初期の改革勢力はさまざまな道を選んでしたが、金星圭が選んだ道はそれなりに典型的なものであった。彼は両班階級の周辺部で生まれ、新旧交替期を利用して成長し、ほどなく嫡統よりもさらに伝統らしい理念を構築し、ついには嫡統として公認されることになるというドラマを展開した。幼いころ、金星圭やその生母を蔑視していた従孫金灑鎮が世を去った後、72歳の金星圭は灑鎮の孫寿東の手からついに祭祀権を引き継いだ。「祭祀権を移譲させ」「祭主を変更させること」は、貧しく身分の賤しい庶出が享受することのできる最大の栄光であった。精力・経綸・偉業にもかかわらず、金星圭は庶出という烙印を消し、「東洋の美德」を再構成することに生涯を捧げた。祭祀権が移譲された金星圭は、次いで草亭公派を創始し、1936年、この世を去った。なすべきことをなすまでは死さえも拒んだ1人の男の時遅い終末であった。このように彼の公的な生涯は驚くほどの奮闘で一貫していたが、私的な生涯は不遇であった。金星圭は妻を相次いで失い、なんと5人もの妻を迎え入れ、また数度にわたり子供も失っていたのである。このような彼が、自身が選び歩んできた道に対する懐疑や躊躇を最期の瞬間までどのようにおさめていたのかは分からない。彼は、自

分がこの世を去っても、朝鮮信託会社が100年の間は宗中の財産を維持し、草亭公派の子孫が家門の名誉を輝かせてくれるであろうと思っていたかもしれない。たとえ、長男祐鎮が「叛逆」によって父に背を向けたとしてもである。金星圭が世を去ったとき、哲鎮は木浦府会議員として奉職中であった。また、翼鎮は毛沢東軍に従軍していたが、父の訃報に接し帰国したところであった。以後、大きく異なる道を歩むことになった2人の兄弟は、父の遺産をどれだけ保ち、どれだけ誇ったであろうか。金哲鎮については詳しいことは分からないが、金翼鎮は父が世を去った直後カトリックに帰依し、自分が受け取った財産は小作人に分配したり、一部をカトリック教区に献納したりしたといわれる<sup>107</sup>。金星圭一家が暮らしていた木浦所在の成趣園は現在、北橋洞<sup>ブッキョドン</sup>聖堂の敷地になっている。

## 7. エピローグ

ちょうど1900年代に「英雄が時勢を造るのか、時勢が英雄を造るのか」などのテーマが流行していたように、1920年代には「新旧思想の衝突」「新旧思想の交代」「新旧道徳論」などのテーマが流行していた。このとき「新旧」が「老少」に対応する意味を帯びていたことは注目し値する。3・1運動直後、各地で結成された青年会<sup>108</sup>が雄弁に語っているように、朝鮮半島において近代が始まって以来、本格的には一度も提起されたことがなかった「世代」という問題が登場しはじめたのである。青年会という組織運動の場合、年齢制限規定が置かれるようになったのは1920年代半ばに近づいてからであったといわれる。初期の一部地域では青年会を後援する父老会

<sup>107</sup> 윤관선 「야인선생의 추억」 김익진, 前掲書, p.331.

<sup>108</sup> 例えば、金祐鎮が育った全羅南道地域の場合、3・1運動以前に結成されたことが確認される青年会は2か所に過ぎない。しかし、1922年になると同地域の青年会は23か所に増えた。이기훈 「1920년대 전남 지방의 청년 단체와 청년 운동」 『역사문제연구』 2011, p.177.

が組織されることもあったが、1920年代半ば以降になると、新旧衝突といえばまさに「青年」と「父老」とを、あるいは「子弟」と「父兄」とを連想させるほど、世代の線引きによって新旧が分けられるようになっていった。新旧衝突やそれにともなうさまざまな社会的現象のなかで、父老ないし父兄世代が犠牲になることもあったであろうが、そのような事例が話題になることはほとんどなかった。その代わりに、早婚した妻が「父母の決定」「父母の圧制」の犠牲者となる屈折した現象が話題になった。また、知識や表象の世界では、新世界に出て行った息子世代が父母の圧制のせいで挫折し自死したというような叙事が大きく取り上げられた。「少年の自殺」(『東亜日報』1924.10.25~10.26)のような新聞記事、盧子泳ノチヤヨンの「無限愛の金像」のような小説は、その代表的な例であるといえる。しかし、無能力で無知な父や祖父と、覇気には満ちているが早急な息子とが対決するこれらの扇情的な叙事は、ある意味で3・1運動直後の複雑な世代葛藤の様相を隠したり、単純化させたりする役割を果たしていたと思われる。その意味で草亭・金星圭と水山・金祐鎮との間の世代葛藤の叙事は、3・1運動期の世代葛藤というテーマに、より多層的で多面的な色彩を与えているものと思われる。

彼らは近代転換期から植民地期に至る時期を生きた人物であり、金星圭は封建的な欲望と近代的な規律とが絡み合った共生を、金祐鎮はこの共生に加えて近代の解放的な側面と抑圧的な側面との間の亀裂や縫合を、それぞれ余すところなく示している。金祐鎮が記したように、「まったく異なる気質」ではあったものの、ずばぬけて個性的であった彼ら親子は、2つの世界の共存可能性をめぐる熾烈な争いを繰り広げていたが、この過程は3・1運動直後の新旧文化間の対決局面にも照応していた。大衆的な水準での新旧対決を、極めて複雑で劇的な方式によって表象しながら、彼ら親子は各自「報恩主義」「自由意志論」と命名した理念的言語を磨き上げていった。「報恩主義」を通じて金星圭は、忠や義を超えた孝の価値を唯一の指



標とし、それを具現する近代的資産や組織を作り上げようとした。また、「自由意志論」を通じて金祐鎮は、自分自身の意志さえも超越する生命の絶対的な衝動を力説することで、性 (gender) や階級を見るうえでの新たな視点を得るところまで進んだ。3・1運動という「植民地市民革命 (colonial civil revolution)」は、このように個人の生き方にも痕跡を残したのであった。

(付記) 資料調査の過程で多くの方々のお世話になった。法律新聞社主幹申連洙<sup>シンヨンス</sup>氏は所蔵しておられる『雲章要訣』を自ら複写していただき、その他資料数点を閲覧させてくださった。また、木浦文学館は金星圭・金祐鎮の遺物の閲覧および撮影を許可してくださった。木浦大学校史学科李基勲<sup>イギフン</sup>教授は資料収集と整理の過程で貴重なご意見をくださった。深甚の感謝を申し上げたい。

(吉川絢子 訳)